
竜の華は朧月に微睡む

ひなき つぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の華は朧月に微睡む

【Nコード】

N4680X

【作者名】

ひなき つぐり

【あらすじ】

竜の華は蒼月に舞うの小話集です。
時々思い出したように更新されます。

Happy Birthday (前書き)

筆頭お誕生日記念の特別編です

ヒロインが元の姿に成長してから半年後のお話。

Happy Birthday

「誕生日おめでとー！！」

唐突に言われて、何のことだか分からなかった。

満面の笑みを浮かべてこれプレゼントだよ！と差し出された着物を見て、今日がオレの生まれた日だということを思い出した。

「これね、喜多さんに教えてもらいながら、頑張ったの。着てみて？」

うふふと笑いながら、オレの背後に回って、背伸びをしながら着物を羽織らせるツキ。

本来の姿に戻って半年。

オレの肩にも届かない小さな体全体で感情を表す姿は、出会った頃から変わらない。

「うん。完璧！さすが私！」

オレを頭の前からつま先まで見た後、満足そうに頷いた。

「よく、今日がオレのBirthdayだって知ってたな。」

「喜多さんが教えてくれたんだ。」

喜多、良くやった。後で賞与を送るぜ。

「一年前はしょっちゅう指に針を刺してたのになあ。人間成長するもんだな。」

「それは忘れるー!!」

むうっと膨れる顔もCuteだ。

ああ、もう、何をしたってツキはCuteでPrettyなのに、こんなPresentまで貰っちゃったら・・・。

「Thank you。」

「You're welcome・気に入ってくれた?」

「ああ、最高だ。」

それなら良かったとはにかむツキを抱きしめ、顎に手をかけると、そのままKissをした。

「このエロバカ宗~~~~!!」

真っ赤な顔をして叫ぶツキも可愛いと思っちまうオレは、相当重症なようだ。

月のない夜に

ふと、意識が浮上して目が覚めた。

まだ虫の音が聞こえる深夜。

虫の声に耳をすませている内に、目が冴えてしまった。

起き上がって布団から出ようとした時、となりでむうと唸る声が聞こえた。

あ、そうか。政宗もいたんだっけ。

起きかけた政宗の頭を二、三回撫でてやると、またそのまま眠りについた。

ゆっくり、起こさないように布団から出ると、そっと障子を開けて、縁側にでた。

草履を履いて部屋から少し離れると、月のない星空を見上げた。

中秋を過ぎて、最初の新月が近づいて来ている。

あの日から、もう一年経つのか。

まあ、半年以上は寝てたらしいから、実感としては半年も経ってないんだけどさ。

「そのような格好では、風邪をひく。」

ぼんやりとしていると後ろから声がして、振り返ると銀色の毛並のオオカミが、緩く尻尾を振って佇んでいた。

「白銀。来てたの？黒金は？」

「あれは蒼竜様に呼ばれて出かけた。我一人で居ったのだが、ふと思いつてな。」

置いて来たんか。

こりゃ後で黒金も遊びに来るだろうな。

確かに、単衣姿で外に出たので、風が吹くと少し寒い。

白銀に寄り添って暖を取りながら、懐かしいなあと思った。

「一年前もこうしてたねえ。」

「あの時は、木曾の山の中だったがな。」

「だね。あの時は、まさか白銀と黒金が蒼竜様のお使いだなんて思ってもなかったからなあ。出会いが出会いじゃん？」

白銀が鬩に嵌っていたんだよね。

あれは演技とかじゃなくて、確実に嵌ってたよ。

「あれは、黒金が・・・！我は巻き込まれたに過ぎぬ！！」

憤慨しだす白銀。

「そうなの？」

「もちろんだ。あの馬鹿者が鬩にあった肉を食べようとしたらか、止めようとしたら勢いが・・・。」

へえ。そうだったんだ。

まったくあいつは食い意地が張っているからと、愚痴を零す白銀の頭を撫でてやると、気持が良いのか、ふっさふっさと尻尾が揺れた。

「蒼竜様も、黒金も変わりはない？」

「ああ。今はあたらしく出来たばかりの次元の安定を見守ってらっ

「しゃる。」
「おお、ビッグバンだ。」

この宇宙の何処かにいらっしやるのかしら。
空を見上げて、きゅっと白銀の首に抱きつけば、大きな尻尾でぐるんと包んでくれた。

「ねえ、白銀はさ、私が前にいた世界とか行ったりする事ある？」
「あるぞ。」
「そう。」

この世界と、私のいた世界と、見上げる星空は変わらない。
北極星を中心に星は巡り、月は28日周期で満ち欠けを繰り返す。
一人で空を見上げていると、時々もとの世界でまだ一人戦っているような錯覚に陥る時がある。

朔夜は、もつどこにも居ないのに。
私の目の前で、死んだのに。
私が、殺したのに……。

「ツキ、しっかりいたせ。」
すり、と頭を寄せて来た白銀に、こくと頷く。
「大丈夫。」

呟く私に、白銀は優しく諭すように言った。
「もう、お前の戦いは終わったのだ。あとは、蒼月華としてではなく、望月^{みつき}としてでもなく、ただのツキとして、お前の自由に生きる

事こそが、蒼竜様の願いだ。」

うん。わかってる。

あの時最後に見た蒼竜様を思い出す。
私の幸せが、願いだと言ってくれた。
その優しさがとても嬉しかった。

その想いに応えたい。
そう思う。

無言で抱きついてしていると、仕様が無い娘だと、白銀が笑った。

「せっかく来たんだ。お前の望む場所に連れて行ってやるうか？」
ふふつと楽しそうに笑った白銀につられて、私も顔を上げた。

「前に連れて行った温泉とかはどうだ？」

温泉かあ。そういえば入ったねえ。

「あの温泉って前から知ってたの？」

「いや、匂いで探した。あの時、お前は相当凄い姿だったからな。
まずは風呂に入れねばと思ってな。」

血まみれだったからねえ。

精神的にもちよつとアレだったし。

「あの時は驚いたぞ。沈んだまま浮かんでこなかったんだからな。」

「温泉の中で考え事してたんだよ。なのにさ、飛び込んで来て突き上げるから、びっくりしてお湯を飲んじゃったんじゃない。」

むくれて言えば、くつくつくつと白銀は笑った。

「確かに、咽せてたな。真っ裸で。」

「ちよっ!!何を!!」

「黒金が真っ赤になって必死に目を逸らしつつも、心配してたんだぞ?」

「うぎゃああ!!」

もう、涙目です。

あの時は白銀も黒金も、ただの狼だと思ってたんだもん!!
不可抗力だ!!

うりうりと白銀の首に顔を埋めて悶絶していると、背後に気配を感じてピシッと固まった。

「おもしれえ話をしてるな?」

「昔の話だ。そう凶悪な顔をするな。」

白銀が呆れたように言い、ぼふぼふと尻尾で私の背中を撫でた。

私は今すぐ旅に出たい。

もしくは、この会話がでる数分前に戻りたい!

「ツキ、行きたい場所があるなら、オレが連れてってやるよ。温泉か?」

白銀にしがみつく私を、無理矢理引き剥がして抱き上げた政宗が、ニヤリと笑った。

「温泉は結構です!」
越後ではのぼせて倒れるし、山では真っ裸で大変な目にあっだし、もうこりこりだ!

「さて、迎えが来たようだし、我もそろそろ戻らないと黒金がつるさいから戻るとするか。」
やれやれといいつつも、尻尾が揺れている白銀は、立ち上がると政宗を見上げた。

「そうそう。お前に合わせていたら、ツキが壊れる。ほどほどにしてやれよ?」

「大事にしてるぜ?今夜だって「何の話さね!?!」おっと。」

だまらっしやい!!

そして、白銀はさっさと帰れ!!

シャツ!と威嚇をすると、白銀はおお恐いと心にも無いことを呟いた。

「くっくっ、その様子なら、いらぬ心配だったな。では、帰る。またな。」

楽しそうに言うと、白銀はそのまま山の方へ向かって走って行ってしまった。

残ったのは、私を抱き上げたまま愉快そうに笑う政宗と、真っ赤な顔で政宗の肩に顔を埋める私。

うう、この状況どうしてくれようか。

「ツキ、どこかに行きたいのか？」

部屋に向かって歩き出した政宗が、うって変わって真面目な声で尋ねた。

肩から顔を離して、前を見て歩く政宗の横顔を見る。

「そんなの、一つしかないよ。」

あの日から、私の求める場所は、ただ一つ。

「それはどこなんだよ？連れてってやるよ。だから、一人で行くんだよ？」

ピタリと足を止めて恐い顔をする政宗の首に頭を寄せて、私はクスツと笑った。

「ここ。」

政宗のいる場所。
ここに居たいの。

少しの間呆けていた政宗は、私の言葉を理解すると、嬉しそうにでも照れたように顔を赤くした。

うわ、貴重な顔だなあ。

クスクス笑う私を抱え直すと、政宗は足早にまた歩き出した。

「ほどほど、は無理だな。」

「は？」

「そんな可愛い事を言われたら、我慢は無理だって話だ。」

は？え？な？

呆然と運ばれる私に待つて居たのは、足腰立たなくなるまで致されて、喜多さんに呆れられるという、とほほな朝だった。

教訓。

口に出す言葉は、後先を良く考えてから発しましょう。
うっ……。

子犬と出会いました 前編(前書き)

neco様の作品「炎色の萩」とコラボしていました。
ホーイ・・・へ(〃)ノ ヒヤッ

子犬と出会いました 前編

ある日、こっそり抜け出した山の中で、らぶりいな女の子に会いました。

いつもの山の、いつもの川で、ひと休憩してから帰るかなあと草を掻き分けた所に、その子が足首を押さえて座り込んでいた。

私より小柄な、丸い黒目がちの可愛い女の子。服装からして、忍っばいんだけど・・・。

その女の子は、警戒心剥き出しで私を見ていて、同時に辺りに気を配ってる。

私以外の人が来るかと警戒してるんだろう。黒脛巾組ならば、当然私の事は知ってるはず。

こんな警戒心丸出しな態度はしないだろう。

つてことは、他所の忍かあ。うーむ。

どうしたもんか。

「えと、足大丈夫？」

とりあえず聞いてみる。

女の子は警戒したまま、こくつと頷いた。

「立てる？」

少し考えたあと、女の子は悔しそうに首をふった。

「触ってもいい？」

立てる程度には治癒しようかと思って言ってみたけど、女の子はじりっと後ずさってしまった。

困ったなあ。

どうしようかと頭を掻いていると、後ろから人の気配がして、私と女の子同時にぎくりと顔を強張らせた。

「や、ヤバイ……。」

最初に言ったとおり、私はこっそりここに来ました。こっそりって事は、誰にも何も言っていないって事で。前方ではなくて、私の後方から聞こえるって事は、間違いなく私を追って来たって事ですよね。

そわそわしだす私を訝し気に見上げる女の子。

仕方ない。この子を残してトングズラするわけにもいかないし。

はあつとため息を吐いて後ろを振り返り、近づいてくる気配の主を待った。

後ろの女の子は、動けないのか動く気がないのか、じっとしている。

「あー、お嬢いたいた。」

現れたのは、忍装束を着た女。

「空夜？あれ。任務中じゃなかったの？」

空夜は、無口が多い黒脛巾組の中で珍しく佐助並に良く喋る忍で、任務が無いときはお土産とか持ってきてくれるとても良い人だ。

この前は、越後の帰りに日本酒をこっそり持って帰ってきてくれて、二人で飲んだんだよねえ。

今は任務でどっかに行ってたと思ったのに。

「さつき戻ってきたばかり。お嬢が抜け出したと若が大騒ぎして
る所に帰っちゃって、もうとばっちりも良いとこだ。」

「うげー!!」

「門を出た時点で、お頭が報告をあげたらしいぜ？」

なんてこつたい……。
もつと警戒して出かければ良かった!!

頭を抱えて唸る私の後ろで、女の子が控えめに口を開いた。

「あの……。空夜さん……。」

ほえ？この子空夜の知り合い？

空夜を見上げれば、女の子を見て目を丸くしていた。

「あれま。小萩じゃん。どしたの？」

「使いを頼まれたんです。でも、足をすべらせてしまつて。」

うつむいてしゅんとする様は、もうなんというか、おねいさんに全
てまかせたんさーい!!と叫びたくなるほど可愛い。

はふーはふーと鼻息荒く女の子を見ていると、空夜が呆れ気味に私
を見た。

「お嬢、変質者っぽいからそれやめたほうがいいぞ？」

「空夜、今すぐその激烈可愛い子を私に紹介しやがれお願いしま
す。」

「……言語が乱れてるぞ？」

いいから!!

「あー、小萩、この人は……。えと……。その……。」
なにまごついてんのよ。

イライラしながら空夜を見上げると、困ったような顔をして見返さ
れた。

「なあ、お嬢つて結局どんな立場になるの？」

「は？」

「だってさ、若の家臣でもないし、兵士でもないし、俺ら忍とも違

うし。」

そう言われればそうだね。

今までは居候で通してきたけど、それも違うしなあ……。

「うーん、一応客人扱いだったけどねえ。今は仕事もしてるしなあ。

あ！政宗の守役二号ってのはどう!？」

一号はもちろん小十郎だ。

散々お世話してやってるし、これが一番しっくりくるかな。

「いやあ、それ若が聞いたら、お嬢ど偉い目にあつぜ?。」

ぼそつと呟いた空夜の声は無視です。

「まあ、いいや。とにかく、この人はツキ。んで、こっちはさす兄の弟子の小萩。今はさす兄の所で武田に仕えてる。」

「小萩と申します。」

ぺこつと頭を下げる小萩ちゃん。

うむ。らぶりいな生き物は何をしても可愛い。

「ツキです。ってな訳で、足見せて?。」

は？と怪訝そうな顔をする小萩ちゃんの前にしゃがんで、押さえて
いる手をそつとどけた。

けっこつ腫れてるなあ。折れてはいないみたいだけど。

「捻挫だねえ。痛かったでしょ。すぐ治してあげるからね。」

撫でる様にゆつくり手を患部に当てると、蒼い光がぼうつと灯った。

「お嬢は癒しの力を持つてるのさ。」

固まって足を凝視している小萩ちゃんに、空夜が苦笑しながら教え
た。

「これでよしつと。立ってみて?。」

「はい。」
素直にゆっくり立ち上がる小萩ちゃん。

立って、驚いたような顔をして、足踏みして、ジャンプして、それから私を見た。

「すごいですね！全然痛くない！」

キラキラした目でこちらを見る小萩ちゃんに、何か既視感を覚える。

「ねえ、空夜。この純粹培養な瞳をどこかで見た事あるんだけど、どこだったかな。少なくとも、伊達には居ないよね？」

こんなの欲しいっ！て強烈に思ったことがあったような。

「ユツキーじゃね？属性同じだし。」

ああ、幸村に似てるのか。

可愛いなあ。幸村とちがって、小さいし、女の子だし。

連れて帰りたいけど、お使いの途中って言ってたしなあ。

頭を撫でて怒られないかな？わしゃわしゃっ！て撫でたい！

両手をワキワキと動かして葛藤していると、空夜がそういえばと、小萩ちゃんを見下ろした。

「小萩、使いつてうちに用事か？」

「あ、はい。伊達殿に書簡を届けに。」

なんと！持ち帰れる！！

「なら一緒に行こう！私の部屋にこの前こっそり用意した甘味があるから、一緒に食べよう！」

「甘味……。」

きらーんと小萩ちゃんの目が光った。

決まりだね！！

私の頭を押さえつけながら、空夜が落ち着け！となだめるけど、わっほーい！とハイテンションに喜んでいた私はすっかり忘れていた。

抜け出してきたことが、すでに政宗にはれていたということ。

この後私に待ち構えている運命を。

いつかの様に、門の前で仁王立ちしている政宗と小十郎を見るまでは。

この歳になって、正座で説教されるとか、もうほんと泣けます。
とほほ……。

子犬と出会いました 後編

久しぶりに説教されて、ただいま部屋でぐったりしております。

うう、あの二人の波状攻撃は、言い訳を挟む隙がないんだよ。

黒脛巾どもめ。逐一なんでもかんでも政宗に報告しやがってえええ。くそー。いつそ裏で黒脛巾組を配下に置いてくれようか。

八つ当たりでぶちぶち黒脛巾組を呪っていると、庭に気配を感じて起き上がった。

「あの・・・大丈夫ですか？」

心配そうな顔で立っていたのは、小萩ちゃんだった。

ううっ！優しい！

オニ悪魔の様な奴らからの仕打ちの後は、優しさが余計身に染みರುವわ。

「ありがとう。優しいのは小萩ちゃんだけだよ。」

入って、入ってと、手招きをして、小萩ちゃんが座る円座を用意する。

「そこに座って。今お茶を用意するね！」

「あ、お構いなく。」

「いいから、いいから！」

遠慮がちする小萩ちゃんの腕をつかんで円座に座らせると、この前買った茶筥筒からお茶のセットを取り出す。

「空夜、お湯貰ってきて。」

甘味を狙って天井に潜んでいる空夜に言うと、あいよーと返事が聞こえた。

「小萩ちゃん、お使いは終わった？」

「はい。後は返書を持ち帰れば終わりです。」

返書は今政宗が用意しているらしく、その間の時間にとこっちへきたらしい。

「それに。足を治して頂いたお礼も言ってますから。」
とのこと。

なんて律儀な子!!

感動した!!

「うう、最近唯我独尊な奴らに囲まれてたから、沁みるわあ。」
目尻の涙を拭いながら、茶菓子差し出す。

この前作ったドライフルーツだ。
砂糖がなかったので、飴玉で作ってみたんだけど、意外にうまかった。

「これはりんごで、こっちは桃。」

どちらもこの前佐助が持ってきたものだ。

勧めると、恐る恐るりんごのドライフルーツを摘まんで、口に入れる小萩ちゃん。

「美味しい……。」

目を丸くしてドライフルーツを見つめている。

良かった。口にあった様だ。

「良かったら、後で袋に詰めるからお土産に持って帰ってね？」

「ありがとうございます！」

ふおお！小萩ちゃんの後ろに尻尾が!!全開でブンブン振り回されてる尻尾が見える!

眼福じゃ〜。

ほのぼのとしていると、空夜がお湯を持って帰ってきた。それを受け取ってお茶を入れながら、空夜にもドライフルーツを勧める。

「ああ、この前こつそり作ってたやつか。へえ、りんごがこんな風になるとは。」

しげしげと眺めて口に放り込むと、むぐむぐと口の中で転がす。

「もうすぐ柿がなつたら、渋柿の焼酎漬けも作りたいなあ。九州からなんとか焼酎を仕入れられないかなあ。」

入れたお茶を小萩ちゃんと空夜の前に置きながら、空夜に問う。

「俺のつてで良いのが居るよ。そいつに手配するように言っておくぜ。で、その焼酎漬けてどんなんだ？」

「渋柿を焼酎に漬けてから密閉空間に置いておくと、渋みがなくなつて甘くなるんだよ。」

「なーんだ。美味しい酒になるのかと思った。」

あからさまにがっかりする空夜に対して、小萩ちゃんが期待に満ちた目で私を見ている。

甘いのが好きなんだなあ。

「出来上がったら手紙を書くから、ぜひ食べにきてね?」

「っ!!はいつ!!」

とても嬉しそうな顔の小萩ちゃんに、私ノックダウンです。

「く、空夜、鼻血出る。懐紙くれ。」

「おいおい、しっかりしろよ。」

だって!あまり表情変わらないけど、この子笑うと破壊力すごいよ!?

小十郎が笑うより威力あるわあ。

「もう、いつそうちの子にならない？」

ぜひ欲しい。私の癒しわんこ！！

本気で引抜を持ちかけようとした時。

「ちよつとー、うちの小萩を勝手に引き抜こうとしないでくれるかなあ？」

「師匠！」

「さす兄！」

すたつと庭に佐助が現れて、油断も隙もないなあとぼやいた。

「だって、そつちは幸村もいるし、勘様もいるじゃん。うちにも癒しキャラよこせ！」

「旦那はともかく、山本の旦那に癒しはないでしょうが。」

「あの魅力がわからんとは、愚か者め。」

縁側に座る佐助にお茶を入れながら、ふんつと鼻で笑えば、佐助はそれならさと、笑った。

「ツキちゃんがうちに来る？大将も旦那も両手をあげて歓迎するよ？」

まだ諦めてなかったんかい。

まあ、その気持ちは嬉しいけどね。

「さす兄、それシャレにならないからやめてくれ。」

青い顔の空夜が慌てて佐助を止めた。
が、間に合わず。

「武田はうちと全面对決するってことか？」

いきなり政宗の声がして、全員が入り口を振り返った。

あちゃーっと空夜が頭を抱え、佐助の顔が若干引きつって居る。

小萩ちゃんは空気を読まずに桃のドライフルーツを口にいれてもぐもぐ。

私はそんな小萩ちゃんにこれも美味しいよーと、もなかを差し出す。

「お、お嬢空気を読んでくれ。できれば助けて？」

すぎる様な空夜に、にっこりと微笑む。

「私の癒しの時間を邪魔すんな。」

後ろでは佐助と空夜と政宗の怒号が飛び交っているけど、気にしなない。

時折何かが壊れる音も聞こえるけど、後で政宗に修理をさせるから問題ないし。

「小萩ちゃん、今度は泊まりで遊びにおいでね？」

「ありがとうございます。」

はにかむ小萩ちゃんに至福を得る。

ああ、こんな妹が欲しい……。

「ちょ！竜の旦那！！それはやばいって！！」

「若！！ここがどこだかわかってやってる！？」

「お前ら全員吹き飛ばせHello……。」

「政宗、それやったら、喜多さんにチクるからね?」「私ごと吹き飛ばす気か!!

「……つち。」

喜多さんの名前に一瞬凍りついた後、しびしび刀を納める政宗の前には、力尽きて倒れる忍が二人。

まったくもう、手加減を知らないんだから。

呆れつつ政宗を見上げると、懐から白いものがはみ出ているのが見えた。

「政宗は返書が出来上がって持ってきたの?」

「あ? ああ。まあな。」

そっか。もう小萩ちゃんは行っちゃうのか……。
残念だ。心から残念だ。

「佐助のお迎えも来ちゃったもんね……。仕方が無いか。」

「え? 師匠がわざわざ僕を迎えに?」

びっくりして齧り付いた最中から顔を上げる小萩ちゃんの顔が、ほんのり赤い。

「……へえ……。」

「任務ついでだ。わざわざ迎えに来たわけじゃないよ。」

こちらは飄々とした顔の佐助だけど、初めて会った時も確か幸村が心配で様子を見に来たんだっただよね。

まったく、心配性の母親め。

しかし、小萩ちゃん……。
ちらりと佐助を見る。

ああいうのが良いのですか。へえ。

「お嬢、顔がにやけてるよ?」

おっと。いかんいかん。

慌てて顔を引き締めると、ドライフルーツを巾着に入れて小萩ちゃんに手渡す。

「がんばってね?」

渡しながらそつと耳元で囁くのも忘れない。

とたんに顔を真っ赤にして、違いますからああああ!と叫んで飛び出していつてしまった。

あ……返書……。

「やれやれ、まだまだだなあ。」

返書を小萩ちゃんの代わりに受け取って、佐助は溜息をついた。

「まあまあ。今のは私が悪かった。叱らないであげてね?」

「なにを言ったの?」

「ん……秘密。」

これは小萩ちゃんが自分で言わなきゃならないことだからね。

空夜も勘付いているのか、にやにやしている。

腑に落ちない顔をしつつも、先に行った小萩ちゃんが気になるのか、佐助は返書を懐にしまうと小萩ちゃんが飛び出した方向を見た。

「気をつけてね。」

「はいはい。」

じゃ、と呟くと、佐助はそのまま一瞬で消えた。

「さて、部屋の片付けですよ？政宗？空夜？」

私の部屋は、台風が来たのかってくらいしっちゃんかめっちゃんかにな
ってる。

フルスマイルで二人に告げれば、顔を引きつらせてあははと笑った。

子犬と出会いました 後編（後書き）

この先小萩ちゃんがどう成長していくのかは、necco様のみぞ知る（笑）

初雪デス(前書き)

スキーツアーのパンフレットを眺めてて、思いつきました。

初雪デス

雪が降った。

そりゃもう、一晩で数十センチ級に。

朝起きて、あまりの寒さに何事かと障子をあけてびっくりした。

「雪が降ったらやることは一つと決まっている!!!」

流石に単衣じゃ寒すぎるので、着物を羽織って、いざ準備完了。

「もっはー!ー!ー!」

「朝からうるせえぞ、ツキ。」

小十郎が部屋に入ってきたのと同時に、縁側から外へ大の字のままダイブ!!

「ツキ!」

ぎよっとした小十郎が走りよってくるが、私はゆっくり起き上がって、自分で作った型を見下ろす。

「見てみて!押し型!」

あはは!と笑いながら自慢すると、がっくりと縁側に座り込んだ小十郎は溜息をついた。

「全身雪まみれだぞ。早くこっちに来い。」

「どうやらお気に召さなかつたらしい。ちえ。」

「雪なんぞ、これから数ヶ月毎日嫌でも見る羽目になるんだぜ?」

「うんざり感を漂わせる小十郎。」

「そうかもしれないけどさ、今日は初雪じゃん?」

「それでも、私は遊びたい!」

「てい!と作った雪玉を小十郎に向けて雪を投げつける。」

「甘いな。」

「ひょいっと小十郎にかわされた雪玉は、そのまま部屋の中へ。」

「なに騒いでるんだ？」
襖を開けて中に入ってくる政宗。

「「あ！」」

ばふ！

勢いの良すぎた雪玉は、そのまま政宗の顔面に直撃して、粉碎した。
「ま、政宗様！！」
慌てて立ち上がる小十郎を片手で制して、顔を雪まみれにしたままの政宗は、無言で部屋を突っ切って庭に下りてきた。

「ごめんって。政宗に当てるつもりは……って、ぎゃああああ！」

ばふ！！

大きな手で作られた雪玉は、私が作ったの物の倍はあった。
顔中が雪まみれになった私。

「HA！可愛くなつたぜ？ツキ！」
すつきりしたって顔の政宗。

「……上等だ、ゴルア……。」

かくして、政宗VS私の雪合戦という名の壮絶な死闘が始まった。

ぎゃーぎゃー大騒ぎをしているうちに、何かと人が集まりだし、気がつくとなだかりができていた。小十郎も喜多さんも諦めの境地というか、用意した火鉢の横でほのぼのお茶をすすってる。

「お前ら見てないで手伝って!!」
「こうなりや人海戦術だ!!」

ノリの良い伊達軍の連中は、いいんすか!?!とか言いながら、嬉しそうに寄ってきた。

「テメエ! ツキ! 卑怯だぞ!!」

「うるさい!! 私正義だ!!」

「てめえは浅井長政か!!」

「そんな人知らんがな!!」

言い合う間も、雪玉は途切れることなく飛び交っている。

私も政宗も雪まみれだけど、楽しい。

多分今私の顔は、笑顔全開だろう。

政宗も楽しそうだ。

「小十郎!! おめえはオレの見方だよな!?!」

「は!?!」

「手伝え!」

政宗はついに最終兵器を投入することにしたらしい。

無理矢理参戦させられた小十郎に、容赦なく雪玉をぶつける。

「将を射んと欲すれば先ず馬を射よってね!!」

「流石ですお嬢!!」

後ろから囃し立てる兵士たちに、ピースサインなんてしてみたり。

「上等だ。後ろから殺られても文句は言えねえぜ？」
地の底から湧き上がるような小十郎の声が聞こえて、慌てて振り返ると、極殺モードに入った小十郎が私をガン見していた。

「や、ヤバイ。私今死亡フラグ立ったっばい……？」

「野郎共！お嬢を守るんだ！！」

「おお！！……って……か、片倉様！！それはぎゃああああ！！！！」

「文七郎！！」

雪合戦の禁断奥義、雷仕込みの雪球が飛んできて、文七郎が直撃を食らって撃沈した。

「お、おのれ……！！文七郎、お前の犠牲は無駄にはしない……！！」

くくう！と涙を拭う仕草をして、小十郎と政宗を睨みつける。

「そっちがその気ならば、こちらも容赦はしない……！！」

「え？お嬢？」

ささーつと青褪める兵士の皆さんに、私にはっこり微笑む。

「皆！私の為に、逝ってくれ！！」

「ぎゃああああ！！」

飛んでくる雷を帯びた雪球を兵士どもを盾にして避け、こちらは筋力増強の殺人級の剛速球で投げつける。

「くらえ！！消える魔球！！」

「HA！当たらねえよ！！」

余裕綽々で、腕組みをたまま避ける政宗。

次々と手渡される雪玉を投げつけまくるが、一つも当たらない。

「やるな、花形君!!だが、これはどうだ!!」

いっぺんに二つ手に持って、コンマ数秒差で投げつける。

「ぐはあ!!」

二発目が見事に政宗の顔面に当たり、のけぞって倒れた。
やりい!!

「政宗様!!この仇は小十郎めが!!」

「まだ死んでねえよ!!」

闘志を燃やす小十郎に、涙目で立ち上がって訴える政宗。

ふっふっふ。そろそろ止めと行こうかね。

背後で雪玉を作り続ける兵士たちに、最後の指示を出そうとしたとき、良直が駆け寄ってきた。

「お嬢!!左馬之助が新兵器を開発しやしたぜ!!」

「でかした!!って、それでけえ!!投げらんないって!!」

岩かっつくくらいでかい雪の塊が、男二人がかりで運び込まれる。

これをどうしろっていうのよ。

雪だるまでも作って、壁にするか?

・・・壁?

「そうだ!!孫兵衛、左馬之助!そのまま突っ込め!!」

「げええええ!!」

名づけて人の壁大作戦!!

二人が壁に気を取られている隙に、一気に決めるぜ！！

「上等だあ！！叩き斬ってくれろ！！！」

「小十郎！刀はダメだろうが！！！」

兵士たちには容赦ない小十郎が、腰の刀を抜き放ち、政宗が慌てて止めに入る。

・・・小十郎って熱くなったらこうなるんだね・・・。

楽しい雪合戦から、阿鼻叫喚地獄に変わった伊達軍オールスターズ雪合戦は、綱元さんの仕事ですよ？というお言葉で閉幕したのであります。

・・・目が笑ってなかった綱元さんが恐かったです。

雪合戦のあとは・・・。(前書き)

初雪デスの続きデス。

雪合戦のあとは……。

風邪を引きました。

一人で寝ている部屋がやたら広く感じます。

昨日初雪が降って、雪の中遊んだのが敗因か……。

少しだけ開いた障子の隙間から、今も降り続く雪が見える。

雪の滅多に降らない土地で育って、それから後も雪が積もるような場所には居なかったせいかな、雪に年甲斐もなく大はしゃぎしちゃったんだよね。

珍しく小十郎まで参加したから、余計にヒートアップしちゃったし。

あれだけ皆でびしょ濡れになったのに、風邪を引いたのは私だけという、なんとも情けない現状。

今皆は雪かきをしている。

皆さん流石ですねとしか言えない。

「のど……かわいた……。」

すっかり鼻声になってる自分の声も、情けなさを倍増させてくれる。布団から起き上がって、枕元に置かれた水を飲む。

はふーっと熱の籠った溜息を一つつくと、こてんと真横に倒れた。畳が頬に当たって、冷たくて気持ち良い。

そのまましばらくじっとしていると、後ろで襖が開く音がした。

「ツキ、ちゃんと布団で寝ろ。」

雪かきが終わったのか、小十郎が現れた。

「暑い。床気持ちいい。」

「熱が上がってるんだ。我慢しろ。」

私の右腕と左脇腹を支えて布団に戻そうとする小十郎。

「あーっーいー。」

自分でも意味がないと思いつつ、わがままを言ってみたり。

うー、だるいし暑いし、でもぞくぞくと寒いし、身体中あちこち痛いし、機嫌もよろしくないのですよ。

「ツキ。子供じゃねえんだから、ちゃんと寝ろ。」

呆れる小十郎に、むすつとなる。

「なんで私だけ？小十郎も風邪引けばいいのに。」

「鍛え方が違うんだ。お前ももつと野菜を食って、体を鍛えろ。」

野菜じゃ体は鍛えられないと思いますが……。

あ、いや、ビタミンとればいいのか？

なんて考えていると、何時の間にか布団に寝かせられて、乱れた単衣を整えられていた。

「うっ、年頃の女がしてもらうことじゃないよう。」

流石に、男の人に直してもらうのは恥ずかしいのですよ！
ますます熱が上がった気がする。

「そう思うなら、大人しく寝てろ。」

「あい。」

搔卷を掛けてもらうと、はふーつとため息を吐いた。

「なんか欲しいもんはあるか？」

額に手を当てて熱を測りながら、小十郎が顔を覗き込んだ。

「んー。ない。」

本当はアイス食べたいとか、冷凍みかん食べたいとかあるけど、この世界にあるわけない。

「そうか。」

乱れた前髪を直しながら頭を撫でる小十郎の手の感触に、ここに
来た翌日にも熱が出たことを思い出した。
あの時は熱を測られるだけでも、びくついてた。
なのに、今は着物を直してもらっ様にまでなつたか。
ははは……。

「なんだ？」

「いや、前もこんな風にして貰ったなあと思って。」

「……ああ。拾った翌日か。」

拾ったって……まあ、そうなんだけどさ。

「あの頃も、今もじつとしてねえのは変わらねえな。」

あう。呆れられてるし。

むうっとして、掻卷をずり上げて、顔を隠す。

「どうせ、良い年して落ち着きが足りませんよーだ。」

「ま、落ち着いたツキなんざツキじゃねえってことだな。」

よしよしと頭を撫でられて、ますますむくれる。

小十郎は口では子供じゃないんだからって言っても、私をまだ
子供扱いするんだよね。

もう元の姿に戻ったって言うのにさ！

「もう一眠りしてる。あと二刻程で夕餉だ。」

「はい。」

やけくそで子供の様に返事をしてやれば、小十郎は少し笑ってまた
私の頭をひと撫でしてから、部屋を出て行った。

治癒しちやえばいいんじゃないかね？とか思われがちなんだけど、病気
って治癒効果が元々薄いんだよ。

まして、治癒が苦手な私が自分にかけてって、大した効果は無いん

だよね。

自力で治すしかないってことなんだけど……。
何日で治るかな、これ。

あーあ、雪遊びは楽しかったのにな……。

外の景色を見ようと、縁側の方へ寝返りをした瞬間、障子の隙間から四つの目がこちらを覗いていて、悲鳴を上げかけた。

「なっ！？つげほつごほつ！！」

体を丸めて咳き込んでいると、障子がからつと開いて、慌てた様子の良直が飛び込んできて背中をさすった。

「す、すいやせん。お嬢。驚かすつもりは……。」

「げほつ！だ、いじよぶ。ごほつ、み、みず……。」

孫兵衛がさつと湯飲みを差し出してくれたのを受け取って、一口飲み込む。

水分が喉に浸透して、なんとか咳が収まった。

「はあ、ありがと。」

人心地ついて、改めて四人を見回す。

昨日も一緒に雪合戦をした、良直、孫兵衛、左馬之助、文七郎だ。

「どうしたの？小十郎ならさつき行っちゃったけど？」

「お嬢が熱を出したって聞いたもんで。」

左馬之助がおずおずと答えると、他の三人も肩を小さくして頷いた。

「心配で様子を見に来たんです。」

「そうそう。」

「まだ熱は高いんですかい？」

代わる代わる質問されて、面食らいつつも四人の気持が嬉しい。

「大丈夫。風邪なんて、寝てれば治るんだから。それより、昨日はかなりアレな雪合戦だったけど、皆は平気なの？」

怪我は昨日のうちに治癒しておいたから、問題は無いはずだけど。見た感じにも、全員元気そうだ。

「俺らは大丈夫です。鍛えてますから！」

良直が胸を張って答えた。

ブルータスお前もか！！

しばらく話をした後、御大事にと去っていった四人を見送って、

再び布団に転がる。

くそー。このままでは病弱の烙印を押されちゃうよ。

鍛えれば風邪を引かなくなるのか？

野菜を食べれば良いのか？

うーん。とりあえず、風邪が治ったら、一から体を鍛えなおすかな。最近寒くてさぼりがちだったし……。

考えているうちに、瞼が重くなって次第に意識が遠退いていった。

真っ白な雪原の中に、一人だけで立っている。

どこまでも続く雪原と並行する蒼い空。

粉雪が風に舞って、太陽に反射されてダイヤモンドダストのようにキラキラと光った。

綺麗だけど、冷たくて、寂しく感じる。

どうして私は一人でここに居るのだろう。

皆はどこにいるの？

振り返れば、今まで歩いてきたであろう足跡が、どこまでも続いて
いた。

前は何一つ跡のない雪原。

歩けば良いのか。

待てば良いのか。

どちらにしても、一人は寂しい……。

カタンと小さな物音がして、目が覚めた。

ぼんやりと音のした方向に首を傾けると、ちょうど政宗が夕餉の乗った膳を置く所で、いい匂いも漂ってきた。

「起しちゃったか。」

ぼーっと見上げる私に政宗は苦笑すると、枕元に胡坐をかいた。

「どうだ？」

額に手を当てて熱を測りながら、こちらを覗き込む政宗。

今のは、夢……？

それとも、こちらが夢？

「ん……………」

今ひとつ何を聞かれているのか、理解ができなくて曖昧に返事をしている、政宗は眉を寄せた。

「ずいぶん熱がまだ高いな。飯は食べそうか？」

「ん……………」

「起きれるか？」

「ん……………」

背中を支えて起されて、そのまま政宗の方に寄りかかる。

寝起きなのか、熱のせいかわ、ぼーとした頭のまま、政宗を見上げる。本物だ。こっちは現実。

一人じゃない。

「まずはこれを飲め。」

白湯を渡されて、ゆっくり飲んでいくうちに、少しずつ頭がクリアになってきた。

「ありがとう。」

湯飲みを返して、はふーっと息をつく。

だるい体に力を入れて、政宗から離れて膳の所に正座する。

まだ節々が痛い。

夜になってあとどれだけ上がるかな。

食べるだけ食べて、さっさと寝て、早く回復しなきゃ。

「ほら、食えるか？」

お椀によそられたおかゆを差し出されて、受け取る。

「いただきます。」

ぼそつと言った声は、先程より掠れが激しくなってる。

「喜多さんはどうしたの？」

こういうときに活躍しそうな喜多さんを、今日はまだ一度も見てない。

まさか風邪引いたとかじゃないよね？

「ツキに風邪引かせたのは、オレと小十郎だから面倒見ろって言われた。」

「は？」

驚いて政宗を見上げると、ばつが悪そうな顔をしている。

「悪かったな。」

「政宗たちのせいじゃないよ？薄着で遊んでたのは私だし。鍛え方が足りないらしいし？」

「どちらも私が油断したせいでしょ？」

首を傾げると、政宗はちよつとだけ嫌そうな顔になった。

「お前がそれ以上鍛えたら、洒落にならねえからやめろ。」
それはどういう意味ですかねえ？

言い返したいところだけど、今日の所はそんな元気もないし、勘弁してやるう。

と、匙でおかゆをすくって口に運ぶ。

歯ごたえ無し。味も鼻が壊れているのであまり感じられない。でも、微かに出汁の味が利いてるのは分かった。

「ゆっくり食え。」

「うん。これ美味しいね。」

「……そうか。」

なぜ、政宗が照れるの？

……って、まさか、これも政宗が……!?

思わず凝視をすると、政宗は早く食うちまえ！と叫んだ。

言ってることが数十秒前と真逆になってるし。

政宗が作ったおかゆは、にやける顔のまま、ゆっくり食べさせていただきました。

食べ終わったツキが再び布団に横になると、枕元に座って掻巻を掛けなおしてやる。

「あとは寝てれば治るから、大丈夫だよ？」

政宗はまだ夕飯食べてないでしょ？

と心配するツキの頭をゆつくりと撫でる。

「寝るまでは居てやるよ。」

「もう、政宗まで子供扱いする……。」

むくれて見せつつも、ツキはそのまま大人しく目を閉じた。

つい先ほどまで寝てたのに、体力が落ちているのか、すぐにゆつくりとした呼吸になって、寝息を立て始めた。

さつきは赤い顔で苦しげな表情をして眠っていたが、今は顔こそ赤いものの、表情は落ち着いていてほっとした。

弱りきって、ぐったりしているツキは、いつかの姿と重なって不安になる。

話を聞けば、前の世界では雪の降らない地域にいたらしい。

寒さに慣れてねえんだろうな。

これから着る物と部屋の火鉢を多めにしてやらなければ。

本人は薄着をしていた自分が悪いと言っていたが、喜多の言うとおりツキの体力を考えずに年甲斐もなく雪遊びに夢中になったオレらが悪い。

それに……だ。

「こつこつというのは、子供扱いとは言わねえよ。」

あどけない寝顔を眺めて、ふっと笑みが零れる。

「特別扱い、だ。オレが飯を作って運んで、寝付くまで傍に居てやる奴なんざ、ツキくらいのもんだぜ？」
額にそつと唇を寄せれば、ふにやっつとツキの顔が笑み崩れた。

竹取物語異聞 上(前書き)

もう、いろいろごめんなさい。

でも楽しかったの(笑)

竹取物語異聞 上

むかーしむかしって、戦国時代から見たら800年位前か？な昔、竹から生まれたかぐや姫と呼ばれる女の子がおりまして。って、私のことなんだけどね。

私竹から生まれたらしいんだよね。

NOT 哺乳類。

もはや人類ですらなくなったのか私……。

「ツキ！いい加減起きろ！！」

だから布団で寝転がっていると、養育者その1小十郎じいさんが恐い顔で襖を開け放った。

「乙女の部屋をノックもなしにあげないでよー。そんで、ツキじゃなくて、かぐや姫ね。」

「乙女なら、そんなだらしの無い恰好で寝てるな。朝餉になるから、さっさと起きて仕度しろ。」
「名前については無視ですか？」

仕方が無い。起きるとしますか。

小十郎が畑仕事に行ってくる！とウキウキしながら出て行くのを見送ってから、よいしょと起き上がって仕度を始めた。

台所では、養育者その2佐助ばあさんが味噌汁を椀によそって、今日も完璧！と上機嫌だ。

「ツキちゃんおはよう。」

「いや、だから私かぐや姫だつて。」

「ツキちゃん寝癖がついてるよ。」

お前も無視なのか!?

せつせと寝癖を治してくれる佐助に頭を任せていると、畑仕事に行つたはずの小十郎が殺気を漂わせて戻ってきた。

やばっ! 昨日おやつ代わりに、失敬したきゅうりのことがバレたか!?

それとも、一昨日抜いた大根!?

だらだらと内心冷や汗をかいていると、小十郎は鍬を置いて刀を握んで私を見た。

「ツキ。」

「ごめんなさい!」

「は?」

土下座をして謝ろうとしたら、小十郎が不思議そうな顔をした。

「おめえを嫁にと、また有象無象共が懲りもせずに来たから、家から出るなど言いたかつたんだが。」

「あ、そうですか。了解です。」

なんだよ。びびらすんじゃないよ。

焦つたじゃねえか。

「が、おめえに聞き出さなきゃならねえことがあるようだな。片付けたらきつちり話してもらおうか?」

あう! ! 墓穴掘つたああああ! !

かくして、全てを白状させられて説教された拳句、この歳になつ

てまで尻叩きの刑に処せられたのであります。
うう、小十郎め・・・セクハラで訴えてやる・・・。

そんな平和・・・平和か？・・・まあ、平和か。な日々が過ぎて、やがてついに小十郎と佐助を越える結婚希望者が現れた。
しかも五人も。

いや、そこまで期待されるような容姿はしてないんすけどね。
物語の都合上仕方が無いって言うか・・・。
そもそも私が人類かどうかも怪しいってのに、みんな良く頑張るなあと感心しちゃうよ。
これから養育者たちを倒した人たちに会うわけなんだけど・・・。

「ツキちゃん、どうしてそんな恰好をしてるのかな？」
佐助が顔を引きつらせて私を見ている。
え？そんなに変かな。自分では結構イケてると思ったんだけど。

「なんで姫が忍装束着てるの!？」
俺様そんな子に育てた覚えはありません!!とさめざめ泣く佐助。
「だって、小十郎も佐助も負けたんじゃ、後は私が勝つしかないじやん？結婚なんてしたくないし。ここで自宅警備してる方が楽しいし。」

「ツキちゃん、自宅警備って・・・つまりニートで引きこもりっ

てこと？」

「Yes, That's light！」

「片倉の旦那！！早く嫁に出そう！！！」

うわーんとバタバタ走り去る佐助。

なんだよ。ニートで引きこもり最高じゃん。

そんなこんなで、無理矢理十二単を着せられた私の目の前には、五人の男共が並んでおります。

赤い服を着ているのが、真田幸村。

赤いもふもふなヅラを被っているのが、武田信玄。

百足を象った兜の鎧姿で、につこにつこしているのが、伊達成実。
奇抜な衣装で、頭から羽を生やしているのが、前田慶次。

ここまではいいんだけど、最後の一名からは、どう見ても結婚希望には見えない黒いオーラが漂ってるんですが……。
真っ白い髪を長く伸ばした男、明智光秀。

「その白いの。志望動機を述べよ。」
「気になってしょうがない！！」

明智はふふつと笑うと、小首を傾げた。

「私は、美味しい魂を求めてきたのですよ。」

「……………」
「……………」
チーン……………」

へ、平然と言いきつた！！
結婚関係ないじゃん！！
殺しに来たんじゃん！！

こんなこともあろうかと、伝説の傭兵を雇っておいてよかったわ！

「小太郎。」

名前を呼べば、音もなく私の背後に気配が生じる。

「ちょー！ツキちゃんいつの間に小太郎と契約してたの！？」

「そんな金がどこから！？」

養育者たちの驚きの声には耳を傾けることなく、私は小太郎に指令を下す。

「殺れ。」

こくん。

忍者刀を抜いた小太郎が疾風のごとく、明智に襲い掛かった。

「まずは貴方からという事ですね。うふふ……。」

どこから出したのか、鎌を二本振り翳し、小太郎に襲い掛かる明智を迎え撃つ小太郎は、無言で忍者刀をものすごい速さで繰り出した。

時折、明智の声で、「いたあい（はあと）」とか聞こえてくる。

変態だ。変態がいる。

こつという輩は抹殺した方が世の為人の為だ。

そのまま場外乱闘に纏れ込み、家から出て行く小太郎と明智を全員無言で見送る。

小太郎、夕餉の時間までには戻っておいでねえ。

さて、放置していた他四人だけど・・・。

幸村はまあいい。成実もまあよい。慶次も良いとしよう。

ねえ、信玄公。何でここに来た？

たくさんいる側室さんたちはどうしたのかな？

他のメンバーより、倍近く歳をとってないかな？

まあ、将来一番安穩と生活できそうだけども。

じいっと胡乱な目で見ていると、信玄公が片眉を上げた。

「儂か？儂は幸村が不甲斐なかつた時の為^に為^に来たのだ。気にせずに見合いをするが良いぞ！」

付き添いかよー！！

いい歳した男の、見合いの付き添い！！

ありえねえと、幸村を見ると、フルフルと震えていた。

ほら、怒ってるじゃん。

モンスターペアレンツってたちが悪いよねえ。

「御館様が某を心配してくださるそのお心！！わざわざ斯様な田舎まで同行してくださったその懐の深さ！！某、心の奥底より感謝したでございまする！！御館様！！」

「うむ！！幸村！！」

「おやかたさまあー！！」

「ゆきむらあー！！」

「はいはい。後は外でやってくださいね。」

佐助が手馴れた様子で二人を外に連れ出す。

「おやかたさばあああああ!!」

「ゆきむるあああああ!!」

徐々に遠くなっていく声。

つかさ、田舎って……。

あ、小十郎が傷ついて隅っこに行っちゃった。

小十郎、私は都会の真ん中の30坪より、田舎の100坪の方が好きだよ？

よしよしと小十郎の背中を慰めていると、帰ってきた佐助が手にしていた手紙を成実に渡した。

「さつき黒脛巾組の奴らが、これを渡してくれて。」

「なんだろ。梵からかな……で、こ、これは……!!」

なに?なんて書いてあるの?

すすす……と成実の後ろに気配を消して回って、手紙を盗み見る。

えと、なになに?成実様が見合いの席に行かれたと、お父様に聞きました。せいぜい幸せになるが良い。なれるものならばな。次に顔を合わせた時が、貴様の命日だ。
つて、なんじゃこりゃ?

「誤解だあああ！これは仕方なくて……！！姫えええええ！！」

がばつと立ち上がると、成実は叫びながら障子を突き破って外に向かって走って行ってしまった。

「どうやら、彼は本命の姫さんがいるみたいなんだよね。」

「ならば、なぜ俺に挑んできた？」

復活した小十郎が、恐い顔で佐助に詰め寄る。

佐助は肩をすくめて。

「片倉の旦那と手合わせができると思つて来たんだつて。」

そしたらうつかり勝っちゃつて、見合いをする羽目になったと。

そしたら、本命の姫様からあの手紙。

……一体どんな人なのか気になる……。

ぐだぐだ感が出てきた御見合いも、あと残るは一人。

前田慶次だ。

肩に乗せた小猿と楽しく遊んでいらつしゃいます。

「えと、もしもし？」

放っておいてごめんなさいね？

恐々声をかけると、慶次はにっこりと笑いかけてきた。

「こいつ夢吉つていうんだ。俺の相棒。」

キキツと首を傾げる小猿に、思わず心が和む。

「夢吉、ね？よろしく？」

手を差し出すと、小さな手がきゅっと私の指を掴んだ。

・・・かわいい・・・。

「ところで、君は恋をしているかい？」

和みかけた空気が、一瞬にして凍りついた。

「恋は良いよ。人を幸せにしてくれるんだ！」

トランス状態に入ったのか、恍惚とした表情で、視線は私ではない
違う何かを見ているようだ。

おい。大丈夫か？

困って小十郎と佐助に助けを求めるけど、二人とも私と目を合わせ

ようとしねえ！！

裏切りものめ！！

「ツキ、俺と一緒に恋をしよう！！恋をすれば、幸せになれる！！」

やばい。この人病んでる。

絶対病んでる。

「い、いやあ、私、そういう宗教的なのはちょっと・・・。」

「恥ずかしながらは無いですよ！俺も一緒だからさ！」

「いや、マジ勘弁・・・。」

どうしよう。これどうしたらいいの？

そ、そっだ。こういつときは・・・。

「恋ならしていますので、間に合っています。」

「それか……。」

「はあ、誰か早く嫁に貰ってくれないかな……。」

一升瓶を抱えてエヘアエヘア笑う私を眺めて、養育者ズは深い溜息をついたのであります。

続く!!

竹取物語異聞 下(前書き)

続きです。

いよいよ真打の登場です。

竹取物語異聞 下

結婚希望者どもを撃退して、平和な日々を送っていたある日。

「ツキちゃん!!」

血相を変えた佐助と小十郎が部屋に転がり込んできた。

「ちょっと、乙女の部屋をいきなり空けるなど、何回言えば分かるのさ。そんで、もう読者も忘れてると思うけど、私はかぐや姫ね。」
重要なことなので、後編でも言ってみました。

「そんなことより、大変なんだよツキちゃん!!」

「ああそつだ!すぐに支度をしろ!!」

は?何事?

訳が分からないまま、またもや十二単を無理矢理着せられ、あれよあれよと言う間に、お客さんの前に引きずり出された。

走らすな!十二単って10?はあるんだぞ!!

暑いんだぞ!!

「これが噂のかぐや姫か?」

ぜえぜえと息を整えていると、上から声をかけられて思わず顔を上げた。

「ほう。顔は普通か。」

ケンカ売ってるのか?

ニヤリと笑って私を見ている男は、右目を眼帯で覆っていて、美形ながらも鋭い目付きのせいにかものすっごく悪そうに見える。
だれ、この人。

さっさと説明せんかゴルア！と小十郎を見ると、小十郎は男を示して。

「このお方は、この国の帝、政宗様だ。」

「ブハっ！！」

帝！？こんな悪そうな面した男が！？

この国オワタ（＾o＾）ノ

「考えてることが丸分かりだぜ？」

そう言った政宗は、極悪そうな笑みを浮かべて、私との距離を半分以下に縮めた。

近い。近すぎっす。

上半身をのけぞらせると、腹筋がプルプルしだす。

「え、えと、何力私二用デスカ？」

「気に入った。」

は？何が？

戸惑っている私を置いたまま、政宗は控えていた小十郎に顔を向けた。

「おい、小十郎！」

「はっ！」

ええ！？なんで小十郎が政宗の前に跪くの！？

びっくりして佐助に解説を求めると、佐助は苦笑した。

「片倉の旦那は独眼竜の旦那の右目的存在だからね。」

右腕じゃなくて、右目なのか！？

通りで、ど田舎の自給自足なスローライフな割りに、裕福だと思っ
たよ！

副業か！！

「そいつ、気に入ったから、連れて帰るぜ？いいな？」

「御意！！」

御意すんな！！

助けて佐助！！

口をパクパクさせて佐助を見ると、佐助は懐紙で目尻をわざとらしく拭った。

「ツキちゃん、良かったね。これ以上ない玉の輿だよ。」

てめえ、絶対穀潰しがいなくなったと喜んでるだろ！！

いーやーだー！！

こうなれば、最終手段だ。

目に涙を浮かべて、小十郎を見上げる。

「こじゅろお・・・私を売るの？」

「う・・・！！！！」

なんで政宗までダメージを受けるのさ。

「政宗様のところに行けば、お前の生活は安泰だ。お前の将来を思

えば・・・。」

「こじゅろうはわたしがいらなの？」

ぼろりとタイミングよく涙がこぼれて頬を伝う。

よし、私は女優！！

「いらないわけがねえだろ！！ツキはうちの子だ！！」

がばあつと抱きつく小十郎。

いける。このまま押し切れ私！

と、思った時。

「ツキちゃん、これ何かな？」

後ろ手に持っていた目薬を佐助に奪い取られる。

「……それは……。」

つち！！佐助め！余計なことをしやがって！！

小十郎と政宗の視線が痛いよ！！

結局その日のうちに、私は政宗の住む内裏へと半ば攫われるようにして連れて行かれたのであります。とほほ。

弘徽殿しきでんを部屋として与えられ、前ほど自由ではないけど、それなりに楽しく過ごしております。

暇さえあれば遊びに来る政宗を追い掛け回す小十郎のおかげで、それほど違和感も感じずにすんです。

え？佐助？

知るかあんな裏切り者。

政宗も別に襲ってくるって訳ではないし、他に女御とか中宮とかいるわけじゃなさそうなので、思ったよりも気楽だ。

襲ってきたら、容赦なく潰します。

何をか、については、あえて言いませんが、潰します。

内裏にきて数ヶ月たったある夜。

なにやら呼ばれたような気がして、起き上がると葎戸をそっと持ち上げて外に出る。

ほぼ満月に近い月が真上に昇っていて、辺りは篝火が無くても大丈夫なくらいには明るい。

「夜に外へ出るのは感心しないな。」

誰もいないはずの庭から声が聞こえ、はっとそちらを見やった。銀色の毛並みの狼が、少し離れた場所からこちらを見ていた。

「狼がしゃべった?」

「我は月に住まう蒼竜様に仕える、白銀という。」

「はあ、さようぞ。」

近寄ってきた白銀は、私の前に座ると、フンフンと匂いをかいだ。ふ、風呂はちゃんと入ってますよ!?

「間違いない。そなたが蒼竜様の末の娘のかぐや姫だな?」

「……はい?あ、そういうえば……。」

最近ツキとしか呼ばれないので、すっかり忘れかけてましたが、そういうえば私かぐや姫でしたね。

「生まれたばかりだったそなたを、すっかり地上に落としてしまったからずっと探していたのだが、ようやく見つけた。」

「生まれたばかりの子供を、すっかりで地上に落とすなよ!」

小十郎とも……。

佐助と小太郎はここに来てからは行方不明なので、知りませんがね！

そうかお別れなのか……。
楽しかったのになぁ……。

しよぼーんとした気持で部屋に戻ろうとすると、政宗に引き止められた。

「どうした？いつもの元気はどうした？」

そうだね。一応お世話になったんだし、政宗にもお礼とお別れの挨拶をしなきゃ……。

地球外生命体な私がここに居ても気味悪いだけだろうし……。

「あのね、今先程、私の本当の親つてのが判明しましてね。」

「本当の親？」

「どうやら、私は月から落ちてきた、竜の子供らしいですよ。」

こんな突拍子も無い話を、信じるかどうかはともかく、話すだけは話さないよ。

驚いた顔をしている政宗に、私は白銀に言われた事を話した。

「明日の夜、迎えが来るそうです。その時に帰らないと、もうだめらしくて……。短い間でしたが、御世話になりました。」

ぺこつと頭を下げる私の肩をがしつと掴む政宗。

ちよ、痛いって。

みしみし鎖骨が言ってますって……！！

「ツキは帰りたいのか？」

顔を上げると、初めて見る政宗の真剣な表情とぶつかり、ドキンと心臓が一際高い音をたてた。

ちよ、なに、これ。

顔に体中の血が上ったような感覚。

「帰りたいのか？」

もう一度尋ねられて、私は堪らずうつむいた。

「帰りたいかといわれても、顔も見たこと無い親だし……。でも、私地球外生命体らしいし……。ここに居ても、そのうち触手とか生えちゃったら目も当てられないし……。」

竜ならともかく、赤黒い触手系生命体になっちゃったら死ぬる。

「帰りたいわけじゃねえんだな？」

「ま、まあ、ここ暮らしが嫌なわけじゃないから。」

自ら進んで帰りたいわけではない。

産みの親の顔は見てみたいけど、私の両親は小十郎と佐助であって、私の暮らす場所はここなんだよね。

でも、それが許されることなのか……。

「よし、ならばオレに任せろ。独眼竜は伊達じゃねえってことを教えてやる。」

くっくくくつと政宗が不敵な笑いを漏らした。

「久しぶりに派手なPartyになりそうだぜ！……」

え？どういうこと……？

「ツキ、オレはやる事ができた。お前はさっさと寝ろ。いいな？」

「は、はあ。」

Let's get psyched up!!と叫びながら足早に去っていく政宗を呆然と見送る。
いやあ、英語を話す帝って、すんげー違和感だなあ……。

で、迎えが来るといわれた翌日の夜。

私は今、政宗に話したことを激しく後悔しているのであります。

「Are You Ready Guys!?!」

「Yeaaaaaaaah!!」

「いいか、テメエら!!気合入れて行けよ!!?!」

「うおおおおおお!!片倉様燃えるっす!!」

えと、なんですかね、この族の集会みたいな惨状は。

戦闘服に身を包んだ政宗と小十郎が、先ほどから兵士の皆様に檄を飛ばしていらっしやるのですが、何でしょう、めっちゃくちゃお似合いなのですよ。

あはは……この国の帝は、族のリーダーさんでしたか……。

乾いた笑いをしていると、すぐ横に佐助と小太郎が現れた。

「久しぶりに様子を見てみれば、随分盛り上がり上がってるねえ。」

「もう言葉もありませんよ。」

「それだけツキちゃんが独眼竜の旦那に惚れられてるってことだよ。」

「う、うううううるさい！見に来ただけならすぐ帰れ！！」

「あらら、真っ赤になっちゃってかわいいこと。」

でもね、と佐助はニヤニヤ笑いを引っ込めて、真剣な顔になった。

「俺様が手塩にかけて育てた娘を、昨日今日現れた輩に横取りされるのは、気に入らないんだよね。」

そう言つと、昇り始めた月を見上げた。

「ま、ツキちゃんは部屋で大人しくしてて？ちゃちゃっと片付けちゃうからさ。」

私の頭をぽんぽんと撫でた佐助は、それじゃ行ってくるねとにっこり笑って消えた。

小太郎もその後が続くように消える。

ああ、私が黙って帰れば、こんなことにはならなかったのに……。

どうしよう、私のせいで、怪我したり死んじゃう人が出ちゃうかもしれない……。

どうしようどうしよう、それだけを繰り返しているうちに、月か

ら蒼い光と共に何かが降りてきた。
ついに来てしまった……。

「かぐや姫、迎えに来たぞ。」

真後ろで声が聞こえて、びくっとなった。

振り返れば、白銀ともう一匹黒い毛並みの狼が座っていた。

「人の子に我らを阻むことはできぬ。さあ、行こう。」
そついうと、黒い狼が立ち上がった。私の着物の裾を銜えて引っ張った。

白銀も後ろに回って私の背中を鼻で押す。

「ツキー！」

促されるままに歩いていると、砂煙を巻き上げてこちらに向かってくる政宗が見えた。

つて、刀を六本も構えてるし！！

道理で、昨日肩を捕まれて、握力半端ねえなと思ったわけだ！！

「ツチー！もうこちらに気づきおつたか！」

舌打ちする白銀に、私は首を傾げた。

どういう事かと問えば、白銀は月から伸びる蒼い光を示して答える。

「あれは幻覚だ。蒼竜様が見せている幻覚。月から来たのは我と黒金のみだ。」

……ってことは、皆が傷つくことはないってことか。

ほーっと安堵の息を吐く私を、黒金がせかす。

「早く。あの者が追いつく前に!!」

狼たちと、政宗……。

月と、この世界。

今も蒼い光を放つ月を見上げて、足が止まった。

必死になってこっちに走ってくる政宗。

いつもいつも小言ばかりだけど、面倒を見てくれた小十郎。なんだかんだ言いつつも、最後は私の為に来てくれた佐助。

人外の生き物でも。

地球外のバケモノでも。

大事にしてくれようとしてくれる人たちが居る。

《昨日今日現れた輩に横取りされるのは、気に入らないんだよね。》

そう……だね。

突然現れて、さあ帰ろうって言われても、そう簡単に切り替えられるはずが無いんだよ。

産みの親がどうした。

私の両親は小十郎と佐助だ。

私の世界はここだ。

「はやく!!!!」

「ごめん、白銀。私月には帰らない。ここに居るよ。」

心は決まった。

私はここに居る。

この世界に落ちてきた日から、ここが私の世界。

妙に凧いだ気持で白銀の前にしゃがむ。

白銀と黒金は目を見開いて私を見ていた。

「わざわざ探しに来てくれてありがとう。でも、私はここに居たいの。だから、月へは帰らない。」

「そんな・・・今日しかないというのに・・・。」
「よろりと白銀がよろけ、黒金が慌てて支えながら私に訴えた。

「ちよつとだけでいいんだ。今日しか蒼竜様にお会いする日はないんだ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

ちよつとだけ？

「蒼竜様はお忙しい身で、滅多に月の宮には戻られない。次に戻れるのは100年後。人界の気に染まったかぐや姫には、そのような時は生きられぬ。それ故に今日しかないと申しておるのに・・・。」

よよよと泣き崩れる白銀。

「蒼竜様が再び出かけられた後には、すぐに人界へ帰すと約束する

から・・・!!」
涙声で訴える黒金。

「ちよお、待てや。今日たまたま私の産みの親が帰ってくるから、ちよつと顔出せつてこと!?!」

「「そう言っておるではないか。」」
見事なハモリっぷりですね。コンチクショー!!

「聞いてねえ!!そんな風には聞いてねえ!!」

もう泣いてもいい?

どうすんの?この騒ぎ。

誰が収めるの?

後ろの方で、やったるぜえええ!!とか、さつさとこいやあああ!
!とか、もう殺る気満々な怒号が聞こえてるんですが・・・。

「ツキ!!行くな!!」

あああああああ!必死な政宗に追いつかれちゃう!!
この状況で、ちよつとだけ月に遊びに行つてきまーす!テへ!とか
言えたら、どんなに楽か!

ゴルア!!白銀!!最初っからそう説明しろやあ!!

どんどん迫ってくる政宗。

後ろからは兵士たちの怒号。

~~~~~っ!! 良し。決めた!!

「白銀、あんた責任とって、この騒ぎを鎮める。黒金! さっさと  
ンズラするわよ!! 背中に乗せやがれ!!」

「な、なんと!?!」

ぎよつとする白銀に全ての責任を擦り付けて、さっさと黒金の背  
中に跨る。

「半年くらい月で休養したら、帰るって伝えといて!」

それくらい時間がたてば、ほとぼりも冷めるだろう。。。タブン。

「ツキいいいい!!!!」

「政宗ゴメン! ちよっくら行ってくるわ! 事情はその白銀に聞い  
といて!! じゃ、まったねえ!!」

もう逃げるが勝ちです!!

その後、こっそりと地上に舞い戻ってきたかぐや姫は、すぐさま帝にとつ捕まり、泣く泣く内裏へと戻ったのでした。

そのあと待っていたのは、もちろんおじいさんからの説教と、おばあさんからのチクリチクリと突き刺さる嫌味攻撃だったのは、言うまでもありません。

しかし、帝だけはかぐや姫の帰還を大層喜び、すぐに自らの中宮に据えました。

これでもうどこにも逃げられなくなったかぐや姫は、帝の傍で一生幸せに暮らしたのでした。

めでたしめでたし。

「めでたいわけあるかああああ！！」

竹取物語異聞 下（後書き）

これ、もう竹取物語じゃないよね……【壁】／＼）……（……  
ハンセイ

## 竜の見る夢

ふと気がつくくと、自室で庭を眺めていた。

オレはなにをしていた？

不思議に思つて辺りを見回すと、部屋の中を覗き込む小さな子供と目が合った。

四つくらいか？

ここにこんな小さな子供は居ないはずだが……。  
いや。どこかで見た事がある様な気もするな。

「ぱぱうえー、おしごとおわつた？」

愛らしい子供の、愛らしい声で紡がれた言葉。

ぱぱうえ？

なんだそりゃ？

首を傾げると、子供も同じ 方向に首を傾げる。  
ん？この子供、ツキに似てねえか？  
会ったばかりの頃のツキにそっくりだ。

「ツキ、お前また縮んだのか？」

恐る恐る尋ねると、子供はにぱあっと笑った。

うっ！可愛いじゃねえか。

手招きすると素直に走り寄つて来て、抱きついてくる子供。  
柔らかな子供独特の抱き心地に、ツキもこんなだったなあと懐かしくなる。

「ぱぱうえ！ままうえがおつきしないのお！」

あ？もしかしたら、ぱぱうえってのは、父上って意味か？  
ってことは、この子供、オレの？

いやいやいやいや、それはねえだろ。

大体、ツキの奴、その辺りの勘が良すぎなんだよ。  
すぐ逃げやがる。

この前も、こっちは完全に乗り気だったのによお。  
あいつめ、次こそは・・・って、待てよ？

「オレが父親ならば、母親は誰なんだよ！？」  
言っておくが、オレは潔白だ！！

「ままうえ？」

「そうだ。名前言えるか？」

「いえるお！ままうえはね！」

「ままうえは！？」

ごくくと唾を飲み込むオレに、子供はにっこり笑った。

「ままうえっていうの！」

えへんと小さな胸を張って自慢気に答えた子供。

おい・・・。

期待させておいて、突き落とすたあやるじゃねえか、このガキめ！

「ここにいたのね。」

「ままうえー。」

部屋の入り口に現れた女の声に、はっとなる。子供はオレの膝から離れて、女に駆け寄った。

顔だ。顔を見れば！！

意を決して顔を上げると・・・逆光で良く見えねえ！

Shit!

「ままうえがおつきしないから、ぱぱうえのところにきたの！」

「あはは、ごめんごめん。最近眠くて眠くて。あなたの時はそれほどじゃなかったんだけど、二人目は眠いわあ。油断するとすぐ寝ちゃう。」

そう言って撫でた女の腹は膨れていた。

その声は、ツキそのもので、自然と顔がにやけてきた。

そうか。でかしたオレ！

見に覚えはねえがな！

つて、そうだよ！身に覚えはねえオレの子供！？んなバカな！

「ぱぱうえ、おかおがかわいいいいい！」

びえええっ！と鼻水垂らして泣き出すガキ。

お、おい。どうすりゃいいんだよ！？

「あーあ、なーかせたーなーかせたー。」  
おま！母親ならなんとかしろよ！

うわっ！鼻水つけんじゃねえ！！

「やめろあゝ。」

「政宗？大丈夫？」

うなされて目が覚めると、笑いを堪えたツキがオレの隣でガキを抱いていた。

夢か……。

前半はともかく、後半は参ったぜ。

「ツキ、その子供、いつの間に生んだんだ？」

起き上がりつつ、オレを見下ろしているツキに聞くと、呆れ顔で答えた。

「んなわけあるか！ここを辞めた女中さんが連れてきた子供だよ。積もる話もあるだろうから、預かったの。」

ねえ？と子供と顔をあわせて首を傾げるツキ。  
子供はきやつきやと楽しげにはしゃいでいる。

「あらあゝ、さつきまで怪獣だったのに、もっご機嫌なのね？」

「かいじゅっ？」

「そう。政宗のお腹の上に乗せて、驚かせようとしたら人見知りしたのかな、そりゃもう凄い泣き声で。」

あの夢は、それが原因か！

よだれなんか垂らしてねえだろうな。

さっと着物を見下ろしたが、被害を被る前にツキが抱き上げたよう  
で無事だった。

しかし、子供の扱いに慣れてるな。

子供と遊んでいるツキを眺めながら、さっきの夢を思い出す。

オレとツキの子供か……。

悪かねえ未来だな。

早く叶って欲しいもんだぜ。

「なあに？にやにやして。気持悪いな。」

「いや、悪かねえとおもってな。」

「なにが？」

首を傾げるツキをガキごと抱き寄せると、耳元に囁く。

「オレとツキの子供みてえだな？」

「んな……！」

耳を押さえて真っ赤になるツキから、きょとんと見上げているガキ  
を取り上げると、片腕に抱いて立ち上がった。

「どれ、少し散歩でもするか？」

「あきや……！」

視界が高くなったことが面白いのか、大はしゃぎのガキを連れて部屋を出る。

少しの間が空いた後、ぎゃああああ！！破廉恥いいいい！！つとツキの声が聞こえてきた。

夢を現実にするまでに、まだまだ時間がかかりそうだなあ、オイ。後ろからものすごい勢いで追いかけてきたツキを待ちながら、ニヤリと笑う。

まあ、追い詰めるってのも、楽しいんだけどな。

## 姫様襲来（前書き）

愛姫は、ほぼオリジナルキャラとなっております。  
史実の愛姫とは別物として、お読みください。

## 姫様襲来

米沢城に嵐が到来した。

いつものように執務の手伝いをしていると、血相を変えた小十郎が、廊下を走って部屋に飛び込んできた。

「どうした、小十郎。静かにしろよお前らしくねえな。」

筆を走らせながら顔も上げずに言う政宗に、小十郎は大変です！と叫んだ。

「愛姫様が参られました！！」

「What!!!!?」

小十郎の言葉に驚いた政宗は、筆を持ったまま、文机を蹴飛ばして立ち上がった。

あーあ、墨が畳に飛び散っちゃってるじゃん。  
こりゃ畳交換だなあ。

それでも拭かないよりはましかなあと、雑巾で畳をトントンと拭いていると、それどころじゃねえ！！と政宗に引つ張り上げられた。

「愛が来る！！おい！兵の配置は済んでるんだろっな！？」

「はっ！整っております。」

はい？なんで兵士を配置するの？今愛姫って言ったよね？姫だよね？はてなマークをいっぱい浮かべていると、突然爆発音が聞こえ、政

宗が舌打ちをした。

「来やがった!!」

「ちよ、政宗、どういうこと?」

「今は話している時間がねえ!喜多の所に行ってる!」

そう言うと、私の腕を振り払い、小十郎を連れてそのまま部屋を飛び出していった。

つてな訳で、今喜多さんの部屋に居るんだけど……。

ドゴオオオオオ!!

「第一防御線を突破されましたああ!!」

「負傷者多数!えーせーへえええ!!」

バキイイイイ!!

「筆頭!!第二防御線も突破されそうです!!」

「テメエら!もつと気合入れていけ!!」

「ぎゃああああ!!」

「左馬之助ええ!!」

「ねえ、喜多さん、私ここに居ていいのかな。なんか外が凄いこと

になつてゐるみたいなんだけど。」  
喜多さんが淹れてくれたお茶を飲みながら言うと、放っておきなさいと、にこやかな顔で返された。  
女中さんたちが慌てたり恐がつたりする様子はないから、多分敵の襲撃とかじゃないんだらうけど、でも外の様子は相当大変なことになつてそつだ。

「愛姫つてだれ？」

「田村清顕様の一人娘で、殿の元許婚よ。」

元許婚つて……。初耳なのですが？

自然と据わつてくる目付きに気が付いたのか、喜多さんがとつくに解消されているから安心しなさいと苦笑した。

「その元許婚が来たつて事と、外の惨状はどう繋がるの？」

「おそらく、愛姫様が……。」

そう言いかけた喜多さんが、ふと外に目を向けた。

その途端。

バキイイイイイ！！

障子を突き破つて、女の人飛び込んできた。

な、何事！？

驚きのあまり、喜多さんにしがみついて硬直していると、女の人がむくりと起き上がった。

「いててて……。政宗の野郎、手加減なく技をぶつ放しやがつて……。つて、あれ？喜多？」

「愛姫様、ご無沙汰しております。」

え？この人が愛姫なの？

大正時代の女学生みたいな袴姿をした細身の女の人、きよとんとした顔でこちらを見つめてきた。

私もマジマジと目の前の女の人を見つめてしまう。

身長は私より頭一つくらい大きくて、容姿は文句のつけようもない美人。

ただし、その手に巨大な斧を持っていなければ。

「喜多、その子誰？」

「彼女はツキと申します。」

挨拶をしないさいと背中を軽く押されて、ぺこりと頭を下げた。

「ツキです。」

「私は愛だ。よろしくな。」

二カツと笑った愛姫は、斧を置くと右手を差し出した。

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

・・・握りつぶされたらどうしよう・・・。

おずおずと手を差し出すと、ぎゅっと握られた。

女性らしい柔らかな手の感触にホツとしつつ、えへっと笑うと、

愛姫は可愛いな！といきなり抱きついてきた。

ぐは！身がはみ出る！！

容赦ない抱擁に魂が口から出かかった時、愛姫が撃破した障子の穴から、政宗が飛び込んだ。

「ツキ！！無事か！？」

ムリ、しぬ・・・。

愛姫から何とか私を引き剥がした政宗は、くったりとなっている私の頬をぺちぺちと叩いた。

「ツキしつかりしろ！・・・愛！テメエの馬鹿力をちったあ考えろ！」

「あはは、ごめんごめん。ツキ大丈夫か？」

政宗の後ろから覗き込む愛姫の顔には、反省とかそう言った類のものには微塵も感じられない。

うう、この人危険だ・・・。

政宗たちが兵を配置したのもなんかわかった気がするよ。

破壊された喜多さんの部屋から、別の部屋に移動して改めて愛姫と対面した。

疲れた顔の政宗と小十郎が私の前に座り、その向こうに愛姫という状況だけどね。

「政宗と小十郎、邪魔だ。ツキが見えないだろ。」

「うるせえ。何しにきやがった。」

「遊びに。最近父上がまた見合い話を持ってきて、うざいんだよ。」

「HA！てめえと見合いしたがる男がまだ居たのかよ。」

「そうなんだよ。めんどくさい。」

なんか元許婚同士ってよりも、会話だけ聞いていると悪友同士の再会にしか聞こえない。

でも、政宗も言ってる言葉はぞんざいだけど、雰囲気は楽しそうだ。会話にも入れないし、政宗も小十郎も背中を向けているし、私は何一つ楽しくないけどね。

なんで私ここに連れて来られたんだろう？

なんて考えていると、誰かがこっちに近寄ってくる気配がした。

「すみません。片倉様よろしいでしょうか？」

襖の向こうから良直の声がして、小十郎が立ち上がった。

どうしたのかとそっちを見てみると、なにやら良直が小十郎に耳打ちをして、それから二人揃って私をみた。

「なに？私がどうかした？」

立ち上がって二人に近づくと、実は・・・と良直が言いにくそうに言った。

「数人が骨を折っちまって・・・。」

「すぐ行く。ってことだから、ちよつと行ってくるね。」

こっちの様子を窺っていた政宗に言つと、渋い顔をして頷いた。

「頼む。」

「了解。」

ちらつと愛姫を見ると、笑顔で手を振っていた。

いや、貴方が原因ですからね？

あー、肩こった。

まったく政宗め、元許婚の前に私を連れ出すなよな。

腕を回して肩の筋肉をほぐしながら、良直に続いて毎度お馴染みとなった兵舎に行くと、かなりの数の負傷者が呻いていた。

「まずは重症者から見るから、案内して？」

「こつちです。」

案内された部屋には、骨折やら裂傷やらで十人くらいが横たわっていた。

痛そうに呻いているのもいれば、気絶しているのもいる。

これは・・・遊びにしてはやりすぎでしょう？

一人ずつ治癒をしながら眉を顰めていると、小十郎が現れた。

「どうだ？」

「死者が出てないのが不思議。やりすぎ。」

最後の重症者を治癒し終えた所で、小十郎を見上げた。

「いつもはこんなに酷くはねえんだが・・・。」

お見合いがどうか言ってたから、むしゃくしゃしてたのかな。でも、だからってやって良いことと悪いことはあると思うのよ。

「兵士の皆は私が看るから、小十郎は城の損害を見て回っておいでよ。流石に物は私じゃ直せないよ。」

冗談めかして言えば、小十郎は少し笑った後頼むと言って、兵舎から出て行った。

「お嬢、手数をかけちまつてすみません。」

忙しそうに走り回っていた良直が戻ってきて、すまなさそうな顔をした。

「ううん。気にしないで。それより、良直は怪我してない？」

「俺は大丈夫つす。愛様が来ない区画でしたから。」

「そっか。しかし、愛姫って凄いね。あの細身のどこにこんな力があるのか……。」

「そうなんすよ。昔からあの方の暴走に、筆頭も片倉様も手を焼いていて……。」

「でしようねえ。」

悪い人じゃなさそうだけど、周りのことを考えてなさそうなタイプに見える。

子供のような人と言えば良いのか？

「遊びに来る度にこれじゃ大変だ。さて、次は軽症者を診るから、順番に並ぶように指示してよ。」

苦笑しながら良直に頼むと、わっかりやした！と応じてお嬢の前に一列に並べ！と叫びながら去っていった。

軽症とはいえ、数十名の治療をして流石に疲れた私は、重い体を引きずりながら、自分の部屋に戻った。

いやあ、治療の練習になったけど、疲れた。

畳の上に倒れ込んで、仰向けになると天井を見上げる。

愛姫か……。

治療した兵士たちは、苦笑こそしていたけど誰も愛姫を怒ったりはしてなかった。  
困った姫だけど、悪い人じゃない。今日は虫の居所が悪かったんだろう、と。

私がこの世界に来る前、政宗と許婚だった愛姫。

お見合いが嫌で遊びに来たと言っていたけど、本当は政宗に会いたかっただけだったりして……。

考えないようにしていたのに、そう思うと胸の中がもやもやというか、むかむかというか、とにかく不快な感じがした。  
政宗もまんざらでもなさそうだったしさ。

「うー……。」

やだな。こんな気持。

ごろごろと部屋を転がって気を紛らわせようとしても、解消なんかされるはずがない。

イライラするし、もうやだ。

一人で悶々としていると、足音が聞こえて部屋の前で止まった。

「ツキいるの？」

喜多さんの声がして、いまーすと返事をすると思が開いた。

よいしょと起き上がって、喜多さんを見上げると、手にお盆を持って中に入ってきた。

「顔色が少し良くないようだけど、大丈夫？」

「ちよっと疲れただけ。大丈夫。」

「なら良いけど……。」

そう言いながら私の前に座ると、お盆の上に乗っていたお茶と饅頭を差し出した。

「おいしそう！頂きます！」

一つ摘んで口に入れると、甘さが広がって、ささくれ立っていた気が落ち着く。

「今日はツキにたくさん我慢をさせてしまったわね。」

饅頭を頬張っていると、喜多さんが微笑を浮かべて言った。

「殿と愛姫様は兄妹の様な関係なの。小さい頃から一緒に遊んだりなさっていて、愛姫様もあのような性格だから、男女の分け隔てもなく接しられてたわ。」

「……なんで、婚約を解消しちゃったの？」

「ある事件で愛姫の御父上に嫌疑がかけられてしまって、それで解消になってしまったのよ。」

ふーん。本人たちの意思ではなかったんだね。

「そんな顔しないの。殿を見ていればわかるでしょ？どれだけツキを大切にしているか。」

「……明日はちゃんとする。」

今日だけは、不機嫌なのを許して欲しい。

政宗と愛姫の間には私の知らない時間があって、それを私が共有することはできない。

それは仕方がないこと。

政宗と私の時間を愛姫が共有できないのと同じ。

「でも、嫌なものは嫌なんだもん。」  
「そうね。」

よしよしと頭を撫でられて、むくれた表情のまま膝の上に頭を乗せた。

「今日の政宗は嫌い。喜多さんは大好き。」

「あら、ありがとう。」

「だから、政宗来たら、喜多さん追い返してくれる？」

「ツキ……。」

「今日だけ。こんなの見られたくない。」

お願いと言つと、喜多さんは仕方がないわね、と苦笑して頷いてくれた。

しばらく喜多さんと二人で他愛もない話をしていると、廊下をも  
のすごい勢いで走る音がして、問答無用で部屋の襖が吹き飛ばされ  
た。

開け放たれたんじゃないよ。吹き飛ばされました。

「ツキいいいい！！ゴメンなあああ！！？」

ぐわしい！つと襖を吹き飛ばしたものがそのままの勢いで突っ込ん

できて、座っていた私にタツクルをかました。

「ぐは!!」

予想もしなかった事態に、なすがまま押し倒されて後頭部を畳に強く打した。

なに？何事？

なんで私押倒されてるの？

「愛姫様、はしたないですよ？」

驚きのあまり頭が真っ白になっていると、見かねた喜多さんが私の上の塊を取り除いてくれた。

愛姫が泣きそうな顔で私の前に正座をしている。

起き上がって私も座りなすと、壊れた襖と愛姫を見比べて、それから喜多さんを見た。

「取り合えず、喜多さん、修理の人とお茶の手配をお願いします。」

「そうね。」

今日は建具屋さんが大もうけだなあ……。

喜多さんが部屋を出て行くと、改めて愛姫と向かい合った。

「で、どうされました？」

「あのおな、ツキが私のせいで、かなり無理をさせたと政宗に聞いたんだ。すまない。大丈夫か？」

なるほど。それで飛んできたのか。

やっぱり悪い人じゃないんだよなあ。

もうちよっと周りを気遣うスキルさえ身につけてくれると良いんだけど……。

仕方がない。

本当は、こんなこと言うガラじゃないんだけど、政宗も小十郎もあの調子じゃ無理だろう。

なんだかんだ言っても、愛姫には甘そうだからな。

「大丈夫じゃなかったのは、兵士の皆です。なぜだかわかりますか？」

淡々とした口調で言うと、愛姫は首を傾げた。

「貴女のせいで、骨を折った者、裂傷を負った者、内臓を痛めた者危うく命を落としかけた者まで居ました。この奥州を守る、大切な兵士を無意味に傷つけ、危うく失う所だったんです。」

「それは、……ちよつと力加減を間違えて……。」  
「死んでしまえば、間違えたじゃ済まないんですよ？それに、貴重な戦力を欠いた状態で、攻め入られたらどうするんです？」  
「……ごめんなさい。」

しゅんとしよげる愛姫に、私ははあつと溜息をつく。

見た目は大人だけど、中身はホント子供だ。

「体を動かしたくなる気持はわかります。普通に遊びに来てくだされば、政宗でも小十郎でも、私でもお相手しますよ。」

「ツキが？」

「私も、そこそこは戦えるんですよ？」

ちよつと笑うと、愛姫は目を丸くして顔を上げた。

「ただし、来る前にはちゃんと連絡をください。そして、物は壊さず、暴れたりもしちゃダメです。いいですね？」

「わかった。そうする。ツキが遊んでくれるなら、ちゃんとする。」  
神妙な顔で頷いた後、上目遣いで私の顔を窺い見た愛姫は、手のかかる年下の妹のようで可愛いと思う。

政宗や小十郎や皆が困りながらも、つい許してしまう気持ちがわかったよ。

「兵士の皆や、政宗たちにもちゃんと謝ってきてくださいね？」

「うん！言ってくる！」

頷くと、愛姫は来たときと同じように、今度は障子を突き破って外に走って行ってしまった。

をい……。

夕方近くになって実家からの迎えが来て、愛姫は笑顔で帰っていた。

「つ……疲れた……。」

襖と障子を吹き飛ばされた部屋とは、別の部屋でぐったりと倒れていると、同じく部屋を壊されている喜多さんがお疲れ様と苦笑しながら入ってきた。

「随分慕われてしまったわね。」

「うん。まあ、それは良いんだけど、なんと言っか、あのパワーには参った……。」

「今日はもうこのまま夕餉までゆっくりしてなさい。」

「そうする。もう気力も体力も限界。」

すぐ近くに座って、繕い物を始めた喜多さんをぼんやり眺めていると、どずどずと足音が聞こえてきた。

この足音は、政宗だな。

「私は寝てます。」

目を閉じて寝た振りをする、喜多さんはくすつと笑った。

「喜多、ここにツキは……っど。」

「お静かに。」

静かに部屋に入ってきた気配は、私のすぐ近くに腰を下ろした。

「なんだ、寝ちまったのか。」

「色々と疲れたのでしょうか。今日はもうこのままそっとしておいてあげてください。」

「そうか。」

そっいいつも、政宗は私の頭を撫でていて、部屋を出て行く気配

がない。

気持ちよくて、うっかり本当に寝そうになっちゃうじゃないの。

「殿。愛姫様への手紙になんと書かれたのですか？」

「あ？」

「先日手紙を出されたのでは？」

「ああ、そういえば書いたな。」

へー。文通ですか。

ふーん。

不穏な気配を漂わせる私に気づいたのは喜多さんだけで、政宗はまったく反応がない。

「……大方ツキのことを書いたのでしょうか？」

「よくわかったな。」

驚いた様子の方宗に、喜多さんがはあっと溜息をついた。

「あれほどに愛姫様が暴れられるなんて、他に考えられませんもの。」

「なぜだ？」

「……殿はもっと女心を学ばれませ。」

そうだ、そうだ。この鈍感男が。

「帰り間に、愛にも同じことを言われたな。それから、なぜかツキに謝れと。訳わかんねえ。」

わかって欲しいような、わかって欲しくないような……。  
複雑な気持だ。

寝たふりをしながら、その後も言葉少なく会話をする二人の声を聞いてるうちに、いつの間にか本当に眠ってしまった。

目が覚めると、部屋は暗くて、しーんと静まり返っていた。  
あれ？あのまま寝ちゃってたのか……。  
寝返りをうとうとしたら、体が何かに固定されていて、首だけで振り返ると政宗が寝ていた。

「起きたのか？」  
動いたせいで目が覚めたのか、政宗がぼんやりと目を開けて、私を見た。

「うん。ここ、政宗の部屋？」  
「ああ。お前の部屋はまだ襖が入ってねえからな。」  
「そっか。」



ニヤニヤ笑う政宗から離れようと暴れるが、びくともしない。  
この馬鹿力が！

「可愛いな。」

「ぎゃー！政宗が気持悪い！」

「H A H A H A、可愛い事をいう口はこうしてやる。」

「何をすん・・・！」

抜け出そうと必死に暴れる私を容易くホールドして、政宗は自らの  
口で私の口を塞いだ。

角度を変え、更に深くなる行為に、呼吸すらままならない。

「~~~~~っ!!」

苦しくなって政宗の腕をタップして、ようやく解放されたけど、抜  
け出そうなんて考えはもう吹き飛んでくったりと布団に沈んだ。

「たまんねえな。癖になりそうだけ？」

ぺろりと自分の唇を舐めた政宗が、妖しい笑みを浮かべた。

その後、さんざん声が枯れるまで喘がされ、次の朝喜多さんに、  
自制と言うものを政宗に教えるように泣きついたのでありました。

Trick or Trick! (前書き)

ハロウィンってことで書いてみましたが、ハロウィン関係ねえ！  
って話になっちゃいました。

趣味丸出しですみません( ; ^ | ^ A

Trick or Trick!

一人部屋で繕い物をしていると、庭に白銀と黒金が現れた。

「久しぶりだね。遊びに来てくれたの？」

縁側に出て二匹の頭を撫でていると、黒金が尻尾を振ってもっと撫でると頭を寄せてきた。

「遊びに来たというよりは、使いだな。」

白銀が答えると、黒金もこくりと頷いた。

「使い？蒼竜様の？」

「いや、月神様だ。」

月神様の使いと聞いて、不安になるのはどうしてでしょうかねえ？しかし、聞かないわけにもいかないか。

「どんな御用かしら？」

恐る恐る尋ねると、二匹は顔を見合わせた後、同時に私を見上げて言った。

「Trick or Treat？」

「は？とりつく……って、まさか……。」

「Trickだな？」

にやっと白銀が笑い、黒金がワン！と吠えた。

ポフツッ！！

頭の上と、後ろで音が聞こえ、慌てて振り返ったが、何も無い。

戸惑いつつ二匹に今のは何だったのか聞こうとしたら、すでに姿は無く、紙切れが一枚落ちていた。

一体何だっというのよ。

落ちていた紙を拾って見ると、一言だけ書いてあった。

「効果は明日の朝日が昇るまで？」

どういうこと？

「ツキ、あいつらがまた来たの……おい、なんだそりゃ。」

部屋の縁側からこちらを覗いた政宗が、目を見開いて硬直している。

「なんだって、なにが？」

「気がついてねえのか？」

「気がつくって何に？」

「ちよつとこつちに来い。」

手招きをされて、政宗の傍に行くとしげしげと私の頭を眺めた後、手を伸ばした。

「なに？」

「本物だな、こりゃ。」

「ひゃー！」

きゅつと何かを引っ張られた感覚がして、思わず首を引っ込めた。

何を引っ張ったのよ、もう。

と、自分の頭を撫でようと手を伸ばすと、なにやらやわらかくて暖

かい、もふつとした感触がした。

な、なにこれ……。

両手を上げて確認すると、それは二個並んでいる。

「ちなみに、尻にもついてるぜ？」

「によおおお！？」

後ろに手を回された瞬間、電撃のような痺れが全身を駆け巡った。

力が抜けて、政宗にしがみつきながら自分のお尻を見ると、着物に穴が開いていて、そこから真っ黒い長い尻尾が生えてました。

Trick or Treat?

そういえば、今日は神無月の月末だっけ。  
つてことは、ハロウィン？

で、悪戯？

……まさか……。

手にした紙をもう一度見る。

まさか、まさか、まさか……！！

明日の朝までこの姿のまま……？

手にした手紙が、はらりと落ちた。

今日はもう何もしない！と政宗に宣言して、部屋に閉じこもっております。

政宗曰く猫耳と尻尾のようで、自分の意志に関係なく動くそれらを、さんざん撫でくり回されてうんざり気味です。

まったく、なんのコスプレだよ。

ぶすつとむくれながら、部屋の隅で不貞寝をしていると、なにやら手にした政宗が戻ってきた。

「ほら、ツキ、こつち見る。」

ふりふり、ぱたぱた。

政宗の奴、完全に人で遊んでるよね？  
殴ってやるつかしら。

「ほらほら。」

ぱたぱたぱた。

ふざけんな！と、政宗に怒鳴ろうと振り返ると、パタパタとゆれる

猫じゃらしが目に入った。  
蒼いリボンがついた、猫じゃらし。  
そんなのどこにあったんだよ

と、呆れつつも視線を外すことができない。

ぱたぱたぱた。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

ふりふりふりふり。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

ぱた。

「んにゃ!!」

たしっ!

はっと我に返った時には、猫じゃらしを手で押さえつけていた。  
たらっとな汗が流れる。

私の意志ではない!  
気がついたら手が勝手に伸びてたんだよ!!  
と、心の中で言い訳をしつつ、恐る恐る政宗を見上げると、にたあ  
つと笑っていやがった。

「ほれ。」

掌をすり抜けてまた振られる猫じゃらし。

どうしても目が離せずに、右へ左へと顔が揺れる。

「くっ!悔しい!!」

「はははっ!! ほれほれほれ!!」  
「むきいいいい!!」

猫じゃらしから目が離せない自分が憎いいいい!!

ほれっと高く上げられた猫じゃらし目掛けて、ジャンプ。  
でもするりとかわされて、また目の前にふりふりと猫じゃらしが現れる。

尻尾がぐるぐる回って、もう我慢ができない!

「おのれ・・・絶対捕まえてやる。」

「できるものならやってみろ。」

上等じゃあああ!!

だだだだだだだだだ!!

「ほらよ!!」

「おりゃあ!!」

どどどどどどどどど!!

「甘い!!」

「ムキヤアアア!!」

だだだだだだだ!!

「うるせえぞツキ! 廊下は静かに歩けと………ツキ?」

首だけを出した小十郎が、怒鳴りかけた後、私の姿を見て目を丸くした。

しまった！！コスプレを見られた！！

頭とお尻に手を当てたけど、時すでに遅し・・・！！

「さつきから何人もすれ違ったじゃねえか。何を今更。」  
呆れ顔の政宗に止めを刺され、orzとその場に崩れ落ちた。  
終わった・・・。

その後、噂が噂を呼び、わらわらと人が集まってきて、どえらい目に遭いました。

もみくちやにされて、引つ張られたりなでられたりして、ついに悲鳴を上げて逃げ出し、ただ今政宗の部屋の押入れの中でガクブルしております。

怖い。みんな容赦ねえよ。

特に、女中軍団！

可愛いと言つて、引つ張り合いしやがった。

尻尾が千切れるかと思つたわ！！

「おい。ツキ、もう誰もいねえから、出て来い。」  
ちよっとだけ開けられた隙間から、政宗が呼んでいるけど、恐いからヤダ!!

「恐くねえよ。ほら、出て来い。」

「……本当に誰も居ない?」

「居ねえって。小十郎が全員まとめて説教してる。」

本当に?

恐る恐る押入れの襖を開けて、外の様子を窺う。

部屋の真ん中で胡坐をかいて頬杖をついている政宗が居るだけで、確かに誰も居ない。

そろりそろりと出て、再度確認をした所で、安堵の溜息を吐いた。

「そういう所は、本物の猫みてえだな。」

「うるさい。政宗もあの地獄を味わえばいいんだ。」

乱れた着物を調べ、ぼさぼさになった頭を手櫛で整えていると、政宗が手招きをした。

いつの間にかその手には櫛が握られている。

「まだ髪が乱れてる。直してやるから来い。」

「そう?」

素直に近寄って、政宗の前に背中を向けて座ると、想像以上に優しい手つきで髪を梳かし始めた。

「結構うまいねえ。」

「オレにできねえことはねえ。」  
「はいはい。」

軽口を叩きながらも、気持ちよさに目を細めてついついもっとやれと催促をしてしまう。

もう耳の辺りとか、最高に気持ちいい。

そのうち眠くなってきて、ふらふら頭が揺れだして、意識が朦朧となった。

「ねむい……。」

「少し昼寝するか？」

「うん。」

頷くと、こてんと後ろにひっくり返った。

当然後ろに居た政宗に寄りかかるような形になり、笑ったのか寄りかかった体が僅かに揺れた。

「仕方のねえ猫だな。」

「ねこいな。」

私の膝の裏側に腕をかけ、反対の腕を背中当てると、ふわりと体が浮かんで、それから暖かなものの上に下ろされた。

うつすらと目を開けると、すぐ目の前に政宗の顔があって、膝の上に抱き上げられたのがわかった。

くぁっとあくびをすると、政宗の胸に頬を寄せて目を閉じた。

ツキが寝ている間にと手に入れた物を持って部屋に戻ると、寝かせた場所に姿がなくなどこかに行つちまったのか？と思つてみると、文机の下から尻尾がはみ出ているのに気づいた。

よっぽどいじり倒されたことが恐かつたのか、机の下に隠れていたらしい。

「今日はもうこの部屋には誰もこねえように言つてあるから安心しろ。」

「そうなの？」

「ああ。だから出て来い。」

頷いて手招きをすれば、ツキは素直に出てきた。

オレが持つてきた物に気づいたのか、辺りの匂いを嗅ぐ仕草をして、首を傾げるツキ。

「なんか良い匂いがする……。」

「ああ、これだ。」

少量の液体を入れた徳利を揺らすと、ふらふらと吸い寄せられるように近寄つてきて、オレの膝に手について徳利を見つめている。

良い反応だぜ。

「飲むか？」

「飲む！」

中身が何かも聞かずに即答したツキに、盃に液体を注いで渡した。琥珀色の液体がツキの小さな口に吸い込まれる。

こくりと飲み込む音が静かな部屋に響き、数瞬後ツキが恍惚の表情を浮かべた。

「にゃは〜うま〜。」

「だろうな。マタタビ酒だ。」

「またたびい〜？なるほど？今私猫ですしい？」

そう言つとツキは、こてんと畳の上に転がって、うつとりと目を細めた。

「気持がいいだろ？」

「うん。いいよ……。」

とろんとした目でオレを見上げるツキは、最高に色っぽい。作戦成功だぜ。

少し酒を口に含んで、口移しで飲ませれば、オレの首に手を回してもっと寄越せと強請る。

最高だ。最高だぜツキ……！！

そのまま帯に手を掛けようとしたとき。

ドス！

「ぐふっ！」

いきなりツキの膝がオレの腹にめり込んだ。

ちよ、まで。あと数寸下だったら、大惨事だぞ。

「にやは〜!!」

腹を押さえて悶絶するオレに構わず、ツキは立ち上がるとそのままふらふらと部屋の外に出て行った。

「たのしいいいい!! にやはははははは!!!!」

次第に遠のいていくツキの声に、痛みを堪えて立ち上がると慌てて後を追いかけた。

「ツキ! 待て! 部屋にもどれ!!」

「や〜だよ〜!! にやはははは!!!!」

ヤバイ。ただの酔っ払いだ。至急回収しねえと、喜多にばれたら大変なことになる。

走って捕まえようとすれば、のらりくらりと避けられ、そのままツキは城中を暴走し歩いた。

「何事ですか政宗様!?!」

「小十郎! ツキを捕まえろ!!」

「は!?! ツキ!?!」

「にやはははは!!!!」

向かいからこちらに来る小十郎と挟み撃ちだ!

両手を広げてツキを止めようとする小十郎に、ツキはスピードを緩めることなく突っ込んでいく。

「にやは!! こじゅ〜だいすき〜!!」



目が覚めると朝で、あの手紙どおり、猫耳と尻尾は消えていた。代わりに、部屋には少量のお酒が入った徳利と、力尽きている政宗と小十郎がひっくり返っていた。

なんでだ？

## 痛みに効く薬（前書き）

このお話のテーマは、生理です。

直接的な表現は避けたつもりですが、苦手な方は回れ右をしてください。

## 痛みに効く薬

ここ数日、ずっとイライラして、そろそろかなあとは思っていたんだけど、やっぱり来た。

女の人なら避けて通れない毎月のことなんだけど、それでも気分は憂鬱だ。

元の世界のような安心な衛生用品など、ここにあるはずもなく、ただひたすら部屋にこもって大人しくしているしかないんだよね。前の世界では不規則で数ヶ月来ないことも当たり前だったのに、こちの世界で生き返ってから数ヶ月もすると、毎月決まって新月になると始まるようになった。

毎月、決まった日からほぼ一週間姿を消す私。

もう、野郎共にもモロバレですがなにか！？

こんちくしょー！

そんなわけで、今月も痛いだるい辛いと、お腹を抱えてうずくま  
って寝ています。

二日目を過ぎれば、だるいだけで痛みとかはなくなるんだけど、今日はその二日目でピークだ。

「うっ……痛い……。」

奥底からずんずんと、鈍い痛みが湧き上がってくる感じに、思わず呟いてしまう。

誰も居ないし、何もできないのはわかってるんだけど、言わずには  
いられないのよ。

当然、鎮痛剤なんて存在しないしね。

貧血気味で起き上がるのも億劫なんだけど、水分は取らないともっとひどくなる。

布団から起き上がって、喜多さんが置いて行ってくれた湯飲みを手にとった。

「はあ、飲みすぎるとトイレが面倒臭いから、そこそこにしなきゃね。」

と考えつつ、お茶を一口飲むと口に含んだ時、僅かに開いた襖から、こちらを覗いている政宗を見つけて吹いた。

「ぶは！げほっ！鼻に入った・・・！！」

「で、手ぬぐいくれ！」

むせていると、部屋に入ってきた政宗が、近くにあった手ぬぐいを差し出した。

「Sorry・大丈夫か？」

「だいじょーぶ。ありがと。」

手ぬぐいを受け取って、こぼしたお茶を拭き取り、それから政宗を見上げた。

「どうしたの？なんかあった？」

生理中に政宗がこの部屋に来たことは一度もない。

男の人が、生理中の女の人に触れることは、穢れに触れることになるからだめなんだって。

非科学的な話だけど、それがこの世界の常識ならば、それに従うまでと私もそのようにしていたんだけど・・・。

政宗の方から来た場合はどうすりゃ良いんだ？

「いや、なにもねえよ。」

「んじゃ、どうしたの？今日はここに来ちゃいけないんじゃないの？」

「まあ、そうなんだが……。」

どうにも齒切れの悪い政宗に、首を傾げる。

……もしかして……。

「心配して来てくれた……の？」

「わ、悪いかよ!？」

顔を赤くして逆ギレしだした政宗。

うわあ、可愛い……!

思わずくすくす笑ってしまうと、ますます拗ねた表情になる政宗に謝った。

「ごめん。心配してくれてうれしいよ。ありがとう。」

「……顔色がよくない。寝てる。」

拗ねつつも、氣遣ってくれる政宗に、素直に頷いて布団の上に寝転がる。

「大丈夫。病気じゃないから。政宗もここに居ると小十郎に怒られるから、そろそろ行った方がいいよ？」

「このオレが穢れなんぞに負けるはずがねえだろ。」

HA!と笑う政宗に、どう返したらいいか困っていると、いつものように頭を撫でられた。

まあ、そもそも非科学的な話だし？

穢れるとかそんなことはどうでもいいんだけどさ。

漏れたりしたら死ぬほど恥ずかしいので、できれば早めに離れて欲しいなあとか思っちゃうんですが。

。。  
まあ、さっき換えたばかりだからしばらくは大丈夫だろうけど・

「腹が痛いのか？」

お腹に当てている手を見て、政宗が聞いてきた。

「お腹も痛いんだけど、腰も痛い。こっやってあつためると、血流がよくなって楽になるんだよ。」

「ふーん。そういうもんなのか。」

そう呟くと、頭をなでていた手を腰に当てて、ゆっくりとさすった。それがびっくりするくらい効果的で、腰の痛いのがゆっくりと取れてきた。

「あー、痛くなくなってきたよ。ありがとう。」

「女つてのは大変なんだな。」

「まあね。。。。。」

体がぼかぼかしてきて、痛みも薄れて眠くなってきた。

「ありがとう。もう大丈夫だよ。そろそろ仕事に戻らないと、小十郎にバレるよ?」

「。。。。そうだな。」

名残惜しげに手を離すと、政宗は立ち上がった。

「後で喜多に温石を持ってこさせる。大人しく寝てるよ?」

「うんわかった。政宗、ありがとうね。」

「Welcome」

少し笑うと、政宗は部屋を出て行った。

しばらくウトウトしていると、喜多さんが温石を持って部屋に来た。

「殿がこれをもっていくようにって言っていたんだけど・・・。」

「ああ、温めると楽になるからね。」

「そうなの？」

「おや？もしかして、誰もまだ知らないのか？」

「冷やしちゃだめなんだよ。温めて、血の流れをよくしてあげると楽になるよ。あと、腰をさすってもらうのもかなり楽になるんだよ。それが、水分は多めに採って、脱水症状にならないようにするの。」

「そうなの？知らなかったわ。これからはみんなにも教えてあげましょう。」

「うん。私ももっと早く言えばよかったね。」

布で包んだ温石を背中に当てて、はふーっと思を吐いていると、喜多さんが首をかしげた。

「でも、なぜ殿がその事を知っていたのかしら？」

「私が教えたから・・・って、あ。」

しまった。ここに来たことは言わない方が良かったんだっけ。

恐る恐る喜多さんを見ると、びっくりはしているけど、怒ってはいないようだ。

「殿がここに来たの？」

「う、うん。」

「何をしに？」

「心配で様子を見にきたんだって。」

「あらあら……。」  
くすくす笑い出した喜多さんに、ほっとしつつ大丈夫かな……と尋ねた。

「いいんじゃないかしら？殿方にも少しは女の苦しみを感じていただきたいもの。それに、いつかはこうなるんじゃないかって思っていたのよ？」

「なんで？」

「初めての時は、ツキが居ないだけでずっとそわそわされてて、小十郎に小言を言われていたんだもの。病気でも何でもないから、心配は要らないっていくら言っても落ち着かないご様子だったし。」

生理明けってバレバレな状況で、顔を合わせるのが恥ずかしくてたまらなかつた私に対して、政宗はごく普通な態度で居んだけど……。  
ふーん。私がいなくていいところではそんなだったんだあ

「実は先月もツキの様子を見に行っていたらしいのよ。これは他の女中から聞いたんだけどね。通りかかった女中に見つかって、慌てて方向転換して去って行ったらしいわ。」

「へえ……。」

おっといかんいかん。顔がにやけちゃう。

恥ずかしくて、照れくさいけど、心配してくれる気持ちが嬉しい。

また来月、照れくさそうな顔をして、ひょっこり現れるんだろうなあ。

今度は温石を持って。

喜多さんとくすくす笑い合いながら、温石だけではない温もりに、  
痛みが引いていくのを感じた。

## 痛みに効く薬（後書き）

本日痛い腹を抱えながら、筆頭botをしていたら、あたたためやろつか？ツイートされて、閃いたものです。その後、あつためてくれるの？って聞いたたら、俺に頼らずその辺を走って来いよと、地に叩きつけられました（笑）

最北端編 二ぼれ話（前書き）

載せきれなかったネタをショートショートショートショート（しつこい）にしてみました。

最北端編 二 ぼれ話

小十郎が到着した翌朝の出来事

「おはよう。早いな。」

「おはよう。うん。流石に今朝は自然に目が覚めたよ。久しぶりによく寝た。」

あれ？なんか小十郎、あまり機嫌が良くない？どうした？

「なんかあったの？」

と、うつかり聞いた私が馬鹿でした。

「何かあったのか、だと？」

「こ、小十郎さん？」

ゆらりと揺れたあと、小十郎は私の肩をがしつと掴み、前後に揺さぶった。

「松永が夢に出て来やがった！俺の畑に現れて、土を耕してやがった！」

「夢！？つてちよ、まつ、て、あたつ、まがつゆれつ！」

松永の夢を見たっただけで、このご乱心っぷりはなに！？

「更に、俺の育てた大根を引き抜いて、立派だたと褒めて、拳句に大根に頬擦りしやがったんだよ！！！」

「おえつ、きもつ、やめつ！」

「あいつが、あの顔で！俺の大根に！くあああ！腹が立つ！！！」

腹が立つってより、笑っちゃわないのか！？  
っつーか、頭がもげる！！誰かたすけてええええ！！

### いつき親衛隊の会話

- A「ツキ様ってかっこいいな。」  
B「お前、いつきってもんがありがたながら、ツキ様につつつをぬかすたあ、親衛隊として許せねえだよ。」  
C「けんども、いつきにはない良さがツキ様にはあるべ？」  
B「お前もか!？」  
D「実は、おらもちよつといいなあって思ってたんだべ。」  
A「だべだべ？いつきは守ってやりてえって感じだけんども、ツキ様は踏んでけるくって感じがするべ。」  
C「殴ってけるくって感じがするな！」  
D「女王様ってやつだべな!？」  
B「お前ら・・・違うべ！ツキ様は、お仕置きよって言って、おらたちのケツを順番に鞭で打つんだべ！」  
A C D「くく・・・それいいな・・・。」  
「」「」

「いつきちゃん、親衛隊の面子が変わってる気がするんだけど・・・」  
「」  
「気にしねえでいいだよ。あいつらは地獄に送ってやっといたべ。」  
「は？」

怖いものバレました

「なあ、お前死体が動くのが怖いんだって？」  
「突然意味不明なことを言うな。」  
「怖いのか？」  
「コワクナイデスヨ。ゼンゼンコワクナンカナインダカラネ！」  
「・・・怖いんだな？」  
「無駄口叩いてないで、さっさとそこの大穴埋めるよ！」  
「あ、その影で南部の兵士の死体が動きやがった！」  
「いつやあああああ！！！！どこ！？どこに居るの！？？」  
「ぐはっ！ツキ、首が絞まってる、オレの首が・・・！」  
「ねえ！どこに居るのよ！！！」

「オレによじ登るな！冗談だ。」  
「・・・・・・・・政宗の・・・・・・・・ばかああああ！！嫌い！もう一緒に寝ない！！今日から小十郎と寝る！！！」  
「ちよ、待て！そんなに怒ることあねえだろ！？？」  
「知らない！！政宗なんて、ゾンビと一緒に寝ればいいんだ！！うわああああん！！！」  
「ツキ！」

その後、むくれるツキの後ろを、謝りながら付きまとう筆頭の姿を、多数の農民に見られたとか。

### 米沢へ帰る日の朝の会話

「なあ、ツキそれってオレのだよな？」  
「そう。貰っちゃったよ。」  
「ああ、それは良いんだが……。お前が着ると、また違ったイメ  
ージだな。」  
「似合わない？」  
「いや、そんなことはねえが……。」  
「佐助が詰めてくれたんだよ。」  
「この体格差を良く詰めたもんだな。」

「だよねえ。それに、ぴったりつてのもすごいよね。」

「An?ぴったりだ?」

「そう。肩幅とか、腕の長さとか、着丈もだけど、胸周りとか測ってもいないのに、見ただけでどうやって合わせたんだろね。」

「胸周りだと?」

「ちょ、政宗?顔が怖いよ?」

「胸周り……。」

「連呼すんな!そして、ガン見すんな!!」

最北端編 こぼれ話（後書き）

おそまつさまでした。

S i l e n t   n i g h t . . . ? (前書き)

クリスマスです。

S i l e n t   n i g h t . . . ?

深々と雪が降り続く奥州。

厚い雲に覆われて、月も星もない夜だけど、うすぼんやりと青白く光って見える庭の景色を、縁側で眺めていた。時折風に乗ってふわりと舞う雪が、私を頭や体に降ってくる。

この冷たい静寂の空気は嫌いじゃない。なんだかとても神聖なものを眺めているような、そんな気持ちになる。

クリスマスの頃歌われる賛美歌を思い出して、囁くような小さな声で歌っていると、襖を開ける音がした。

「冷たい空気が漏れていると思えば・・・。そんな格好でいたら、また風邪を引くぞ。」  
「うん。」

政宗の呆れた声がしたけど、もう少しだけこの景色を見ていたくて、視線は動かさずに返事だけ返すと、舌打ちが聞こえた。すぐに腕が伸ばされて、抱き上げられてしまう。もうちょっとだけ見ていたかったのに・・・。

むっと政宗を見上げると、それ以上に不機嫌そうな顔にぶつかる。「冷え切ってるじゃねえか。」  
眉をひそめて、暖めるようにきゅっと抱きしめられれば、それ以上文句も言えない。

政宗はすぐに障子を閉め、敷いてあった布団の中に私ごと潜り込んだ。

頭まですっぽり布団に覆われて真っ暗状態だけど、政宗の体温と匂いに知らずほっと息をつく。

「せめてもっと着込んでから見る。」

「雪がどのくらい降ってるのかだけ見たら、すぐ部屋に戻るつもりだったんだよ。でも、なんだか目が離せなくなっちゃって……。」

ふお。あつたけえ……。人間湯たんぽ最高だ。

「つたく、また風邪引くぞ?」

「政宗は体温高いねえ。いいことだ。えい!」

「うお!」

冷え切った足を、政宗の足と足の間につっ込んだ。焦った表情になった政宗が面白い。

「冷てえな!」

「あはは、温かい。」

「……そうか。」

あ、なんかヤバイ。

そう思ったときには、政宗が覆いかぶさっていて、大きな手で頬を撫でられていた。

見上げた政宗の表情は、確かに欲情の色が浮かんでいる。

しまった・・・！スイッチが入っちゃったよ！！

「体・・・温めてやるよ。」

うわ、それ寒い！セリフとして寒いよ！！

そう言おうとした口は、あっさり政宗に塞がれて、さらに舌が滑り込んできた。

「~~~~~っ。」

呼吸も儘ならない状況で、さらに角度を変え、深く口付けられて頭がぼーっとなってきた。

「……………はあっ……………」

ぼやける視界に、自分の唇を舐めて私を見下ろす政宗が映る。どこか満足そうな、でも癡猛な表情に、自分でも分からないけど、ぞくぞくした。

これから始まる事に、わずかな期待を抱きつつ、ゆっくり目を閉じると、頬に当てられていた手が耳を掠めて、首を伝って下に降りていく。

襟を広げられて、手が……………。

「ツキい~~~~！メリークリスマス！！」

「黒金！！」

桃色空気をぶち抜く、黒金の陽気な声と、焦った白銀の声が響き渡って、私も政宗も凍り付いた。

「な、なに!？」

「……………あいつら……………」

慌てて襟元を掻き合わせていると、政宗は唸り声を上げて布団から出る。

障子を開け放つと、そこにはトナカイのような角を付けた黒金と、赤いサンタクロースの帽子を被った白銀が仲良く並んで座っていた。うおー!可愛いじゃん!

「Hey、何の用だ？」

「恐っ!」

本能で怯える黒金に、白銀がため息を吐く。

「すまない。黒金は空気を読むということが苦手なのだ。」

いや、あの、白銀、空気を読むって……………。

「今取り込み中だ。用件を早く言え。」

取り込み中って、まさむねええええ!!

あまりの恥ずかしさに、布団から出られないでいると、黒金が首を傾げて私を見た。

「ツキ、風邪引いたのか？」

「……………うん……………」

もうそう言うことにしておこう。白銀が生暖かい目で私を見ているけど、無視だ無視！

「月神様からクリスマスプレゼントだ。」  
そう言うと、白銀は後ろに置いてあったドン　ホー　と書いてある袋を縁側に置いた。

月神様からのプレゼントですか・・・。  
ド　キホ　テの袋って、これまた突っ込みどころ満載ですが、とりあえず中身は何ですかね？

白銀に目を向けると、すつと逸らされた！！

嫌な予感しかしねええええ！！

「月神様からの伝言だ！」  
えへんと胸を張った黒金が、ゴホンと咳払いをした。

「楽しいクリスマスを！！」

絶対私は楽しくないと見たああああ！！

頑張れと意味深な言葉を残した白銀と、任務を無事遂行して上機嫌な黒金が去っていった後、残されたのは黄色の袋。

「なんだこれは？」

障子を閉めて、袋をぶら下げた政宗が、私の所に戻ってきて首を傾げた。

「私の世界の、激安の殿堂の袋です。」

深夜まで営業していて、色々なものが売っている楽しいお店です。

「へえ、これがツキの世界のものか。」

興味津々で袋を覗き、ごそごそと中のものを漁る政宗を、ただ固唾をのんで見守る。

嫌な予感しかしないんだけど、中身も気になる……。

可愛いぬいぐるみとか、化粧水とか……奇跡が起こるかもしれないじゃない!?

「What?なんだこれ？」

びろーんと取り出したのは、赤いサンタクロースの服っぽい、アダ  
ルティなミニキャミワンピース！

よりによって、これかよー！！

ありえねえ！こんなん着るなんて有り得ません！！

「それは、男性用の腹巻きです！！」  
ちよつど良いよ！政宗が使えよ！！

「そうなのか？腹巻きにしちゃ派手だな・・・っと手紙がついてる  
ぜ？」

「あー！」

服からひらりと落ちた紙を、止めるまもなく政宗が拾う。  
手紙に目を通し、服と私を見比べた後、にやっと笑いやがった。

絶体絶命！！

「ツキ、嘘はいけねえなあ？」

にやにや笑いながら、政宗が手紙を私に見えるように差し出した。  
なにになに？

“ ツキに着せて楽しめ ”

ご丁寧に着せ方まで図解で書いてあるし！

「さて、着てくれるんだろ？」

「いや、あの、その……。」

「着てくれるよな？」

じじじじじじ……。

月神様の変態エロオヤジiiiiiiiiiiii!!

「ところで、くりすますって何だ？」  
ふと思い出したように、政宗が聞いてきたのは、さんざんどえらい目にあつて、指一本さえ動かすのが億劫なほど疲れさせられたあとでした。

もう、二度と月神様からのプレゼントは受け取るもんか！



S i l e n t   n i g h t . . . ? (後書き)

皆様、良いクリスマスをお過ごしください。  
私は昼からカオスマスマ会に行って参りますw

H O I L Y n i g h t . . . ? (前書き)

S i l e n t n i g h t . . . ? の筆頭視点です。

H o l y n i g h t . . . ?

今日の執務を終えて、ツキの部屋を訪ねると、襖の隙間から冷たい空気が流れ込んできた。

空気に乗って微かな歌声が聞こえ、襖を開けると縁側で座っているツキがいた。

こんな寒い日に、縁側なんかで何をしてるんだ。

「冷たい空気が漏れていると思えば・・・。そんな格好でいたら、また風邪を引くぞ。」

「うん。」

こちらを見ようともしないツキに苛立ちつつ近寄れば、頭や体に雪が積もっているのが見えた。

いつから座ってるんだ？

舌打ちをして、動かないツキを抱き上げれば、冷え切った体の冷たさが伝わってくる。

「冷え切ってるじゃねえか。」

むっとした表情で、邪魔をするなど言わんばかりに見上げてくるツキを、熱を分け与えるように抱きしめれば、それ以上は抵抗することなく大人しくなった。

障子を閉め、敷いてあった布団にツキを抱いたまま入る。

最初は寒さに小刻みに震えていた体が、徐々に力が抜けていく所を見ると、相当寒かったに違いない。

「まったく、だったら部屋で大人しく火鉢にでもあたってるよ。」

「せめてもつと着込んでから見る。」

「雪がどのくらい降ってるのかだけ見たら、すぐ部屋に戻るつもりだったんだよ。でも、なんだか目が離せなくなっちゃって……。」

「まったく、また風邪引くぞ?」

「政宗は体温高いねえ。いいことだ。えい!」

「うお!」

突然冷たいものが、足の間に差し込まれて、思わず腰が引けた。なんだ!?! すんげえ冷てえ!!!

よくよく考えれば、ツキの足がオレの足の間に差し込まれているようだった。

「冷てえな!」

「あはは、温かい。」

無邪気に笑うツキはわかってるのか?

着物の隙間から伸びた足が、直接オレの足の間にあると言っている。足が動いたたびに、オレを刺激していると言っている。

「……そうか。」

こんなことされて、我慢が出来るか……!

覆い被さり、寒さにほんのり赤くなっていた頬をそっと撫でてや

ると、ツキの目に動揺が走った。  
その表情すらオレを煽るということを、ツキは知らない。

「体・・・温めてやるよ。」

ツキが何かを言おうとして開いた口を、素早く自分の口で塞ぐ。  
奥に縮こまっている舌を、半ば強引に引きずり出して絡めれば、ツキの手がオレの背中に回されてぎゅっと握りしめられた。

いちいち反応が可愛すぎるんだよ！

何度も角度を変えて、満足するまで唇を堪能し、ゆっくりと顔を離すと、苦しげに息を吐きながらツキがオレを見上げていた。

「・・・・・・・・・・はあっ・・・・・・・・・・。」

上気した頬と、潤んだ目が堪らねえ。

これだけじゃ足りない。

もっと、もっとツキを味わいたい。

頬に当てていた手を下ろし、耳や首に触れるか触れないかの距離でなぞれば、目を閉じたツキの体がぴくりと震えた。

良い反応だ。

鎖骨をたどり、襟を緩めて肌の感触を楽しみつつ更に奥へと進入し  
ようつとした時。

「ツキいゝゝ！メリークリスマス！！」  
「黒金！！」

ふざけんな！！

「な、なに！？」

「……あいつら……」

慌てて襟を掻き合わせて動揺するツキを布団の中に残し、立ち上がって障子を開け放つ。

理由如何によつては、神の使者だろうが何だろうが、斬る。

雪の中に居たのは、鹿の角のようなものを付けた黒金と、赤い三角の布を被った白銀だった。

「Hey、何の用だ？」

「恐っ！」

不機嫌を隠すことなく話しかけると、黒金の耳と尻尾がぺっとりと伏せられて、おびえを見せた。

その様子を見た白銀が、ため息を吐いてオレを見上げる。

「すまない。黒金は空気を読むということが苦手なのだ。」  
「つたく、しょうがねえな。」

「今取り込み中だ。用件を早く言え。」

そしてさっさと消える。

が、空気の読めない黒金は、オレの後ろのツキを見て首を傾げた。  
ちっ、今のツキを見るんじゃないやねえよ。

布団から顔だけ出しているツキは、まだ名残を残している。

「ツキ、風邪引いたのか？」

「………うん……。」

「……こいつも一応は男だろう？」

大丈夫なのか？いろいろと。

「月神様からクリスマスプレゼントだ。」

そう言うと、白銀は後ろに置いてあった黄色いものを銜えて、縁側に置いた。

なんだこれは？

見たこともないような素材のものだ。

ちらっとツキを見れば、目を見開いて呆然としている。  
これがなんなのか、ツキは知っているらしい。

ガサガサと音を立てる黄色いものを手にすると、黒金が満足そうに頷いた。

「月神様からの伝言だ！」

胸を張った黒金が、ゴホンと咳払いをした。

「楽しいクリスマスを!!！」

くりすます？なんだそれは？

二匹が帰って行き、よくわからないまま障子を閉めてツキの所に  
戻る。

「なんだこれは？」

「私の世界の、激安の殿堂の袋です。」

「へえ、これがツキの世界のものか。」

こんな袋見た事ねえ。

触ればツルツルとした感触で、引っ張ってもそう簡単には千切れそうもない。

何で出来てるんだ？

中を覗けば、なにか赤いものが見える。

取り出してみれば、赤い筒状の布のようなものが出てきた。

「What?なんだこれ？」

広げてツキに見せると、絶望に染まった表情になった。

おい、一応神からのPresentだろ？

そんな表情をさせるような、やばいものなのか？

しばらく固まっていたツキが、ありえねえと叫んで頭を抱えた。

「それは、男性用の腹巻きです!!」

あ？腹巻き？確かにそれっぽいが……。

「そうなのか？腹巻きにしちゃ派手だな……っと手紙がついてるぜ？」

「あー！」

布からひらりと紙が落ち、何気なく拾うと、字が書いてあることに気が付いた。

なんだ？

“ ツキに着せて楽しみ”

ツキに着せる？これをか？

手にした布と慌てふためいているツキを見比べて、なるほどなと頷く。

どうやら、これはツキへのPresentってよりも、オレへのPresentのようだ。

ならば、ありがたく頂くとするか。

「ツキ、嘘はいけねえなあ？」

にやっと笑って手紙を見せてやると、布団から出てきてのぞき込んだ。

途端、がっくりと項垂れて座り込む。

「さて、着てくれるんだろ？」

「いや、あの、その……。」

「腹巻きなんて嘘はいけねえなあ？」

「……くっ！」

「着てくれるよな？」

しばらく布を睨み付けていたが、盛大なため息を吐いて力なく頷いた。

クリスマスがどんなもんかなんてのはわからねえが、今夜は楽しくなりそうだぜ。

廊下に出た途端、中からツキの怒鳴り声が聞こえる。

月神様の変態エロオヤジいいいいいい！！

神を変態扱いかよ。

仕方がねえ、ご機嫌とりに熱爛でも持つてきてやるか。

くつくつくつと笑いながら、冷えた廊下を歩くオレも、相当浮かれているらしい。

ま、こんな夜も悪がねえな。



White Christmas (前書き)

クリスマス編ラストです

## White Christmas

政宗を一旦廊下に出して、手渡された赤いミニキャミワンピースを着る。

腹立たしいことに、サイズぴったりの下着も付いてました！

ちくしょー！！

うっ、ウン年ぶりのスカートしかもミニ！

足がすーすーするよう。

心許ないよう。

「まだか？」

「心の準備がまだです！」

「なら入るぜ。」

「人の話を聞けよ！」

まだだつて言ってるのに、入ってきた政宗が、私を見て硬直した。な、なんだよう、何か言えよう。

「・・・Unbelievable・・・。」

ちよ！信じらんないってどういう事！？

似合わないのはわかってるんだつてば！

むう、と睨みあげれば、政宗が顔を片手で覆って、ふらりとよろめいた。

ちょっと！いい加減にきなさいよ！？

「もう満足したでしょ！？着替えるから、出てって！」

固まっている政宗を追い出そうと、手を伸ばすと、逆に掴まれてしまった。

そのまま、しげしげと私を上から下まで何度も見回した後、ぴらっとスカート裾をめぐりやがった！

「なにすんじやい！！！」

スカートの裾を奪い返して睨み付ければ、政宗はふっと笑った。

「いいじゃねえか。似合ってるぜ？」

「こんなエロエロしい服が似合うと言われても嬉しくないわい！もう勘弁してよ！」

「よし、そのまま一杯やろうぜ？」

いつの間に用意していたのか、熱燗と杯が二つ並んで置いてあった。コンパニオン扱いかゴルフアアア！

と、思ったものの、寒い日の熱燗はこれまたたまらんのよね。し、仕方がないわね。

飲み終わるまでは、我慢してあげるわよ。

渋々を装って座ると、政宗の膝の上に抱え上げられてしまった。

「ちよつと!」

「そんな格好じゃ寒いだろう?」

「だったら着替えるよ!」

「却下。」

この暴君があああ!!

なんだかんだと宥め賺されて、結局政宗の膝の上で、ちびちびと熱燗を飲んでおります。

もう、保温機能の付いた座椅子だと思おう。

「しかし、お前の世界ってなかなか面白そうだな?」

「そう? 私あまりあつちで遊んだことなかったからなあ・・・でも、クリスマスは確かに特別な日だったよ。」

家族がまだ生きていた頃は、私の家でもクリスマスのパーティーをしていた。

パパがサンタクロースになって、夜中にこっそりプレゼントを置いてくれるんだけど、うっかり落としちゃってママにボディブローくらってたり。

声を出せないから、無言で悶絶するサンタクロースに、笑いをこらえるのに苦労したっけ。

「ふふつ。」

「なんだ？」

「いや、なかなか楽しい思い出もあるもんだなあって思っで。」

政宗の杯に酒を注いで、それから自分のにも注いで一口飲む。かあゝつと熱が胃に落ちていく感じが堪りません。

まさか、この戦国でクリスマスをするとは思わなかったなあ。

つか、こんなのクリスマスとは違いますかね！

あ、そうだ、ちよつと試してみてもいいな。

「政宗、ちよつとおでこ貸して？」

「あ？」

くるりと向きを変えて、政宗の頭を引き寄せて、おでことおでこを合わせて目を閉じる。

私の世界のクリスマスのイメージを浮かべて、政宗に伝わるように念じる。

「何だこれは……。」

「見える？これが私の世界のクリスマス。」

「木がピカピカしてるぞ？」

「それはクリスマスツリー。」

「あの机の上にあるのはなんだ？」

「クリスマスケーキだね。」

おでこを離して目を開けると、驚いた表情の政宗が前屈みのまま固

まっていた。

「これが日本の健全なクリスマスです。」

「すごいな。」

「まあね。電気って言って、さっきピカピカしてる奴があったでしょ？それがあのおかげで夜も明るいんだよ。」

もう一度おでこをくつつけて、サンタクロースを思い浮かべる。

「この赤い服着た男はなんだ？」

「これが正しいサンタクロースです。ちなみに私の父です。」

「Oh・・・。んじゃ、その隣のが・・・。」

「母と兄。」

今思い浮かべているのは、サンタクロースの姿をしたパパを囲んで、みんなで夕食を食べた、最後のクリスマスだ。もう、二度と過ごせない、大切な思い出。

「・・・ツキは母親似だな。」

政宗の言葉に、思わずおでこを離すと、ふっと優しい笑顔を浮かべていた。

「・・・そう、かな？」

「ああ、美人だな。」

「・・・ありがとう。」

恥ずかしくなって、もそもそと元の体勢に戻ろうとすると、背中に腕を回されて政宗の胸に押しつけられた。

「見せてくれてThank youな。」

「ん。」

きゅっと抱きしめられると、胸の奥もきゅっとなるこの不思議。嫌じゃないから、質が悪い。

お酒の作用も相まって、目元がじんわり熱くなる。

俯こうと顔を伏せれば、大きな手が私の顎を掴んでゆっくりと上向かせた。

うー、今日の政宗は意地悪だ。

恥ずかしいことばかりさせる。

耐えられなくなって、目を伏せると、ふわっと風が動いて、唇が塞がれた。

優しい、触れるだけのキスに、なんだか泣きそうになる。

「いつか、家族でPartyをしよう。」

「……………うん。」

目元にキスをされて、目を閉じれば、後は……………。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4680x/>

---

竜の華は朧月に微睡む

2011年12月25日01時48分発行